

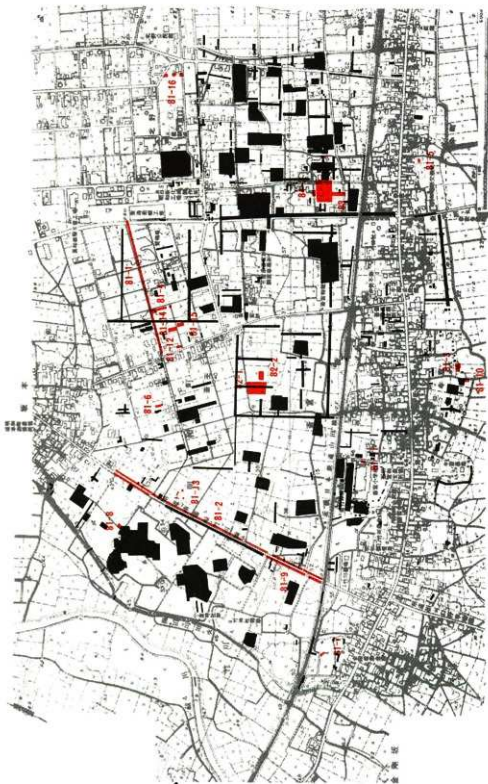
史跡齋宮跡

平成元年度発掘調査概報



1990

齋宮歴史博物館



第1図 平成元年度発掘調査地区

はじめに

昭和61年度より準備を進めて参りました齋宮歴史博物館は、昨年10月19日にめでたく開館することができました。おかげをもちまして開館以来県内外から6万人に上る入館者を得て、連日のにぎわいをみせ、みなさま方には大変ご好評のうちに今年度は終えようとしております。

国史跡齋宮跡の発掘調査は、昨年度までは三重県齋宮跡調査事務所として鋭意進めて参りましたが、今年度からは引き続き当博物館の主要な業務の一つとして、なお一層の努力を重ねて来ているところであります。

今年度は史跡指定10周年目の節目にもあたっており、昨年の10月には開館を記念する意味もあって『齋宮跡発掘資料選』を上梓いたしました。そこでは、齋宮跡の過去の調査で出土した遺物の中から一級品と目されるものを、できる限り網羅してその概要をご紹介しますとともに、それぞれの時代の遺構の概要についてもご紹介をしています。

上記『資料選』でも触れましたが、発掘調査総面積は148,434㎡に達しました。これはなお史跡全体の10.8%に過ぎません。また、史跡の公有化面積は184,702㎡、史跡環境整備面積は17,540㎡となっております。発掘調査にかかわる概報等は、大小含めて34冊を公にして参りました。当概報は通算して35冊目に当たり、齋宮歴史博物館の名において出す最初の発掘調査概報でもあります。

発掘調査の成果は言うまでもなく、当博物館の展示や普及・啓蒙活動の基をなすものですが、とりわけ今年度は従来知られていなかった新出の遺構・遺物に恵まれた年でありました。以下にご報告する発掘調査の成果は、必ずや齋宮跡の解明に極めて重要な鍵となるべきものであることを確信する次第であります。

最後になりましたが、日頃から種々ご指導を賜っております文化庁、齋宮跡調査指導委員会の諸先生方をはじめ、ご協力をいただいております地元のみなさま方に心から御礼を申し上げます、刊行のご挨拶に代えさせていただきます。

平成2年3月

齋宮歴史博物館長

中 林 昭 一

例 言

1. 本書は、齋宮歴史博物館が、国庫補助金を受けて平成元年度に実施した史跡齋宮跡の発掘調査の概要である。
2. 明和町齋宮跡保存対策室が、国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更緊急調査は別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の座標は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分については、「齋宮の土師器（年報1984）」による。第2表参照。
5. 遺構表示記号は次の通りである。
SB; 建物 SK; 土壇 SD; 溝 SE; 井戸 SA; 塀 SF; 道路 SX; その他
6. 史跡東部で確認されている方形区画については、便宜上第2図の番号を与えた。
7. 写真図版で使用した遺物番号は、各次数の遺物番号と一致する。
8. 齋宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長 福山敏男氏
椋山女学国大学名誉教授 久徳高文氏
国文化財保護審議会専門委員 坪井清足氏
京都府立大学学長 門脇禎二氏
名古屋学院大学教授 楢崎彰一氏
名古屋大学教授 早川庄八氏
皇学館大学教授 渡辺寛氏
三重大学助教授 北原理雄氏
三重大学教授 八賀晋氏
9. 本概報の執筆・編集は、齋宮歴史博物館調査課の田阪仁、泉雄二、上村安生、御村充生があたり、坂真弓美、松田早苗、橋本奈保子、尾家恵がこれに協力した。

目 次

I	調査の経過と概要	1
II	第82次調査	5
	(A) 第82-1次調査	5
	(I) 奈良時代前期の遺構	5
	(II) 奈良時代中期の遺構	7
	(III) 奈良時代後期の遺構	8
	(IV) 平安時代前期の遺構	9
	(V) 平安時代後期の遺構	9
	(VI) 鎌倉時代前半の遺構	9
	(VII) 鎌倉時代後半の遺構	10
	(VIII) 室町時代以降の遺構	11
	(IX) 遺物	11
	(B) 第82-2次調査	17
	(I) 奈良時代中期の遺構	17
	(II) 奈良時代後期の遺構	17
	(III) 平安時代前期の遺構	18
	(IV) 鎌倉時代前半の遺構	18
	(V) 鎌倉時代後半の遺構	18
	(VI) 遺物	18
	(C) まとめ	18
III	第83次調査	21
	(I) 平安時代初期の遺構	22
	(II) 平安時代前期の遺構	23
	(a) 平安時代前I期の遺構	24
	(b) 平安時代前II期の遺構	24
	(III) 平安時代中期の遺構	25
	(IV) 平安時代後期の遺構	25
	(V) 鎌倉時代の遺構	26
	(VI) 遺物	26
IV	第84次調査	31
	(A) 第84-1次調査	31
	(I) 奈良時代後期の遺構	31
	(II) 平安時代初期の遺構	31
	(III) 平安時代前期の遺構	33
	(IV) 平安時代後期の遺構	33
	(V) 鎌倉時代後半の遺構	34
	(VI) その他の遺構	34
	(B) 第84-2次調査	34
	(I) 奈良時代後期の遺構	34
	(II) 平安時代初期の遺構	34
	(III) 平安時代前期の遺構	34
	(IV) 平安時代後期の遺構	37
	(C) 遺物	37
	(D) 第83次・第84次調査のまとめ	38

挿 図 ・ 表 目 次

〔表〕	1. 平成元年度発掘調査地区一覧	3
	2. 斎宮跡土師器の相伴関係	4
	3. 第82-1次調査時期別遺構分類表	6
	4. 第82-2次調査時期別遺構分類表	17
	5. 第83次調査時期別遺構分類表	21
	6. 第83次調査 S E 5850出土土器種類構成	26
	7. 第84-1次調査時期別遺構分類表	31
	8. 第84-2次調査時期別遺構分類表	34
	9. 掘立柱建物・堀一覧表	41
	10. 竪穴住居一覧表	43
	11. 斎宮跡発掘調査一覧表	44
〔図〕	1. 平成元年度発掘調査地区位置図	
	2. 方形区画(推定)模式図	4
	3. 第82次調査出土遺物実測図(S B 5632出土遺物)	13
	4. 第82次調査出土遺物実測図(S K 5600出土遺物)	14
	5. 第82次調査出土遺物実測図(S K 5600・5640・5650・5655・5700・5704・5711・5733、S B 5632・5679、S D 142、包含層出土遺物)	15
	6. 第83次調査遺構実測図(掘立柱建物S B 5800遺構平面図)	23
	7. 第83次調査出土遺物実測図(S E 5850出土遺物)	27
	8. 第83次調査出土遺物実測図(S E 5850出土遺物)	28
	9. 第83次調査出土遺物実測図(S E 5850出土遺物)	29
	10. 第83次調査出土遺物実測図(S E 5850出土遺物)	30
	11. 第84次調査遺構実測図(溝S D 5870土層断面図)	32
	12. 第84次調査出土遺物実測図(S D 5870出土遺物)	35
	13. 第84次調査出土遺物実測図(S K 5893・5928、S D 5832・5870、S E 5880出土遺物)	36
	14. 第83次・84次調査掘立柱建物の配置変遷	39
	15. 斎宮跡地区表示図	48
〔付図〕	付図1. 第82次調査区遺構平面図(1:200)	
	付図2. 第82次調査区土層断面図(1:100)	
	付図3. 第83・84次調査区遺構平面図(1:200)	
	付図4. 第83・84次調査区土層断面図(1:100)	

写 真 図 版

1. 第82-1次調査全景（北から）、第83次調査全景（東南から）
2. 第82-1次調査出土墨書土器（蔵長）、第83次調査出土墨書土器（目代）
3. 第82-1次調査全景（南から）、北半景（西から）
4. 第82-1次調査S D 136・S D 5602（東から）、S B 5622と土壇群（東から）
5. 第82-1次調査S B 5643・S B 5644（南から）、S B 5719と土壇群（北から）
6. 第82-1次調査S E 5672と土壇群（西から）、S E 5658・S K 5600・S K 5661・S K 5662・S K 5663（東から）
7. 第82-1次調査S B 5686・S E 5684（北から）、第82-2次調査全景（西から）
8. 第82-2次調査S K 5732・S K 5733（東から）、S D 5746・S D 5747（北から）
9. 第83次調査北半景（東から）、S B 5780・S A 5806（北東から）
10. 第83次調査S B 5820・S D 5822～S D 5824（北から）、S A 5840・S D 5832（東から）
11. 第83次調査S B 5815（東から）、S B 5830（東から）
12. 第83次調査S B 5800（西から）、S B 5787（北から）
13. 第83次調査南部景S D 5843・S D 5844・S B 5853（北から）、S E 5850（北西から）
14. 第84-1次調査全景（南から）、S A 5840（北西から）
15. 第84-1次調査S B 5900（北西から）、S E 5880（北から）
16. 第84-1次調査S D 5870・S D 5874・S D 5875（南から）、第84-2次調査全景（北から）
17. 第82次調査出土墨書土器（椀・蔵・坂己・坂）、へら描き土器（水司鴨三）
18. 第82次調査出土土器、石硯
19. 第83次調査井戸出土墨書土器
20. 第83次調査井戸出土土器
21. 第83次調査井戸出土土器、緑釉陶器、第84次調査出土土器
22. 第84次調査出土墨書土器

I 本年度調査の経過と概要

斎王の森の西方 200m、史跡中央部に位置する上園地区の第5次史跡環境整備事業（別途年報で報告）施行予定地内に大小2ヶ所の発掘区を設定し、平成元年5月8日から第82次調査を開始した。調査面積は計 2,180㎡である。発掘作業員の一時的不足と天候不順などに災いされて、調査面積の割にはやや長期に亘ったが同9月30日に終了した。その間、8月3日に本年度第1回目の調査指導委員会を開催して指導を受けた。

広い発掘区を第82-1次、その東隣の狭い発掘区を第82-2次調査とした。当該調査の最大の目的は、史跡東部で確認している基盤目状の区画溝（第2図参照）のうち一番北を区切る東西溝（S D 291）が、斎王の森西方の当調査地点まで延長しているかどうか、もしそうならば更にその間を区画する南北溝が、史跡東部地域と同様に存在するのかどうか、その手がかりを得ることにあった。

第82-1次調査区北端の東西溝の方向は、上記S D 291と一致し、北端の東西区が当調査地点まで延長している蓋然性は高いと言える。しかし第82-2次調査区東端の南北溝は、鎌倉時代の浅いもので、位置的には問題ないものの史跡東部で従来から見られる120~130m間隔の南北区画溝と同質のものと断定するにはなお慎重にならざるを得ないものであった。

本次調査では、注目すべきへう描き土器と墨書土器に恵まれた。前者は、奈良時代後期の土城から出土した土師器で皿底部外面に「水司鴨三」とある。これで水部司関係の墨書・へう描き土器は、各2点ずつ計4点となった。4点とも奈良時代後期の土器だが、各々の出土地点は相互にかけ離れており、この時期の斎宮寮水部司にも鴨氏が関与していたということ以外、現段階では把握できない。後者は、平安時代前II期の土師器杯の底部外面に優美な筆跡で「藤長」と書かれている。蔵部司長を示す斎宮跡では初出の資料として貴重なものだが、蔵部司の建物を特定するのはなお時期尚早と言わねばならない。なお、この遺物が出土した同じ土城からはもう一点「藤」という墨書土器が出土している。

第83次調査を史跡東部通称中町裏のF5ブロック（第2図参照）内南西部で実施した。調査期間は、9月12日から12月21日までであった。

これまでF4ブロックでは、平安時代初期の5間×2間の東西棟が6棟等間隔に検出され、又東接するE5ブロックでも同時期、同規模の東西棟が4棟、これも等間隔に検出されている。更に南接するG6ブロックでは、一定のエリアを囲むと推定される掘立柱堀列が検出されており、この地域一帯は予てより平安時代初期から前期の斎宮寮の中心的な場所ではないかと想像されてきたのである。実際、当館第1展示室の300分の1模型ではF5・F6ブロックを内院

と仮定して製作してある。即ち、当該調査の目的はここに実際どのような施設があるかを確認することであった。

1,400㎡の発掘区から検出された平安時代初期の遺構として特に注目すべきものは、雨落ち溝を持つ、東西及び南北棟の4間×2間の掘立柱建物とそれらを取り囲むと推測される掘立柱塀列および溝であった。

この塀列と溝が発掘区外へ延びることが明らかであったので、その全貌を把握するために、大小2ヶ所の発掘区(計800㎡)を隣接して設定し、第84次調査を連続して実施した。調査期間は12月20日から平成2年3月14日までである。この間、平成2年2月1日には両調査に関して調査指導委員会の指導を受けた。

二次にわたる調査の結果、上記掘立柱塀列は第14図にも示す通り、東西14間分42m、南北12間分36mの範囲を取り囲む施設であることが判明した。並行する溝は南東角と東辺で途切れるものの、塀列に付属する雨落ち溝と考えられる。

こうして塀と溝によって周囲と遮断された空間に、2棟の掘立柱建物の存在が明らかになった。齋宮跡の調査では初例であり、今これを齋宮寮内のいかなる性格の建物であるか連断することは出来ないが、今後齋宮跡の解明にすぐれて貴重な手がかりになることは間違いない、建て替えの問題も含めて今後の課題としたい。

第83・84次調査では各々1基ずつの井戸が検出され、前者の井戸からは「目代」(平安前Ⅰ期)、「少允殿」(平安前Ⅱ期)、「□司」(平安前Ⅱ期)など墨書土器が出土し、後者の井戸からは「富・男」(平安後期)などの墨書土器のほか、材質は不明だが木製の櫛(破片)も出土した。

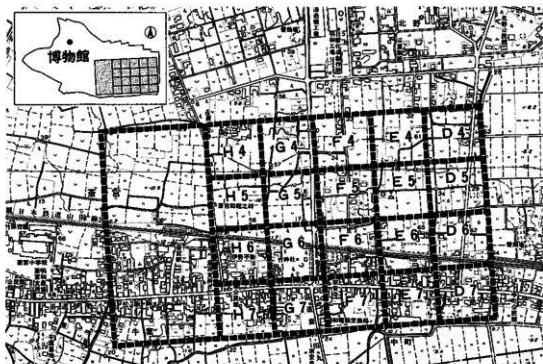
伊勢国守が齋宮寮頭を兼務した場合や在京の寮頭の場合などいろいろなケースが考えられようが、齋宮寮にも目代がいたことが今回初めて判明したわけで、大きな収穫であった。「少允殿」は、「類聚三代格」で知られる寮官人の一つを現地出土の遺物で裏付けたわけだが、「□司」と併せて、今回検出されたものも含め、F5ブロック内で検出されている当該時期の掘立柱建物の性格を、ある程度類推可能にする貴重な遺物である。

第84-1次調査区東端で検出した南北溝は、F5ブロックのほぼ中央に位置する。それがもし道路の西側溝であるならば、齋宮寮全体の遺構形態を究明する上で、他のブロックについても再度見直すべき新視点を提起するものであろう。

上記計画調査以外のいわゆる現状変更に伴う緊急発掘調査は、第1表の通り、第81-1次から第81-16次まで計7,091㎡を実施したが、その調査結果については別途刊行予定の概報にゆずることになっている。

第1表 平成元年度発掘調査地区一覧

調査次数	調査地区	調査面積 (㎡)	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	地区
81-1	6AEC ~F	3,762	1.4.1~ 1.10.13	明和町齋宮字万干他	明和町	町道塚山線拡幅	3・史跡 隣接地
81-2	6ABJ ・K	1,040	1.4.1~ 1.8.30	明和町竹川字古里	三重県	県道南藤原竹川線 拡幅	3
81-3	6ADS -M	180	1.7.4~ 1.7.15	明和町 齋宮字木葉山137	中川 昭	農業用倉庫新築	3
81-4	6AED -L	214	1.7.5~8.9 2.2.2~2.16	明和町 齋宮字東殿2881-2	山本輝雄	個人住宅及び倉庫 新築	3
81-5	6AFQ -C	14	1.8.16~ 1.8.18	明和町 齋宮字中西597-2 他	木戸口高之	個人住宅新築	3
81-6	6ADD -F	112	1.8.21~ 1.8.28	明和町 齋宮字篠林313	池田幸弘	盛土	3
81-7	6ABL -U	36	1.8.31~ 1.9.6	明和町 竹川字中垣内430-7	川本 仁	倉庫新築	3
81-8	6ABJ	186	1.11.28~ 1.12.7	明和町竹川字古里	明和町	古里地区整備事業 便益施設の設置	3
81-9	6ACF	840	1.12.14~ 2.1.30	明和町竹川字中垣内	三重県	県道南藤原竹川線 拡幅	3
81-10	6ADR -V	139	2.1.6~ 2.1.11	明和町 齋宮字木葉山297	明和町	防火水槽設置工事	史跡隣接 地
81-11	6ACM -N	47	2.1.12~ 2.1.19	明和町 齋宮字広瀬3385-2	明和町	齋宮小学校体育庫 移転改築	4
81-12	6AED -A	40	2.2.26	明和町 齋宮字篠林3225	中川 茂	盛土	3
81-13	6ACB	16	2.3.9~ 2.3.10	明和町齋宮 字塚山3276-19他	明和町	芝生広場造成及び 案内板の設置	3
81-14	6AED -F	191	2.3.1~ 2.3.30	明和町 齋宮字東殿2844-2	澄野 茂	宅地造成	3
81-15	6AED -U	220	2.3.19~ 2.3.30	明和町 齋宮字東殿2885-2	西山喜治	盛土	3
81-16	6AG	54	2.3.22~ 2.3.27	明和町齋宮 字北野3655-1 他	中村計吾	宅地造成	史跡隣接 地
82-1	6ADI -F~J	1,600	1.5.8~	明和町 齋宮字上園3095 他	明和町	計画的な調査	1
82-2	6ADI -K・L	580	1.9.30	明和町 齋宮字上園3100 他	明和町	計画的な調査	1
83	6AFJ -C~F	1,400	1.9.12~ 1.12.21	明和町齋宮 字西加座2770-3 他	本山 宏他	計画的な調査	2
84-1	6AFJ -G	670	1.12.20~	明和町齋宮 字西加座2764-3	森西喜作	計画的な調査	2
84-2	6AFH -G・H	130	2.3.14	明和町齋宮 字西加座2679-1 他	明和町	計画的な調査	2



第2図 方形区画(推定)模式图

時期	様式遺構	調査次数	築投影編年	文献
奈良	SB 1615	30次		年報 1980
	SX 2735	45次		年報 1982
	SK 1255	27次		年報 1979
	SK 2120	36次		年報 1981

時期	様式番号	調査次数	築投影編年	文献	
奈良	SD 170	50次	高麗寺2号窯式	年報 1983	
	SE 1800	33次		年報 1980	
	SK 3000	49次		年報 1983	
	中期	SK 1098	21-1次	岩崎25号窯式	真報1(53年度)
		SK 1970	35次		年報 1988
	後期	SK 1291	28次	折戸10号窯式	年報 1979

時期	様式遺構	調査次数	築投影編年	文献	
平安	初期	SK 1445	34次	折戸10号窯式	年報 1980
	前I期	SK 1045	20次	黒笠14号窯式	真報1(53年度)
		SK 1424	44次		年報 1982
	前II期	SK 3127	53次	黒笠14号窯式(南)	年報 1983
		SK 2650	44次	黒笠90号窯式	年報 1982
	中期	SE 3134	51次	折戸53号窯式	年報 1983
	後I期	SE 2000	31-4次	東山72号窯式	年報 1980
	後II期	SK 1730	32次	亘代寺窯式	年報 1980
		SK 1074	20次		真報1(53年度)
	末期	SD 3052	50次	瀬戸窯山茶碗 日段階第4号式	年報 1983

第2表 斎宮跡土師器の共伴関係

II 第 82 次 調 査 (上園地区)

第82次調査を「斎王の森」の西方、史跡中央部の上園地区で実施した。面積は約 2,180㎡である。調査期間は5月8日から9月30日までである。調査地を西調査区(約 1,600㎡)と、東調査区(約 580㎡)とに分けた。前者を第82-1次調査、後者を第82-2次調査とした。第82-1次調査区内東端には昭和49年度に実施の第8-3次Hトレンチ調査部分を含んでいる。

調査の目的は、従来から史跡東部に想定している茶盤目状の方形地割り(第2図参照)のうち、一番北の区画溝SD 291が今回の調査地まで延長してきているのかどうかを確認すること、更にその周辺の遺構の状況を明らかにすることにあつた。

遺構検出面までの深さは0.5~0.6m、基本的層序は、第I層:耕作土、第II層:暗褐色土、第III層:黒色土、第IV層:黄褐色土(地山)である。

(A) 第82-1次調査(6ADI-F~J)

(1) 奈良時代前期の遺構

竪穴住居は調査区の東端あるいは南西隅などで重複して検出したが、規模の明確なものはない。東端にあるのは、SB 5631・5632・5679・5680、南西隅付近にはSB 5686・5687・5692~5694がある。やや中央よりに土壇と重なってSB 5668がある。

SB 5631・5632の新旧関係はSB 5631の方が新しい。いずれも東側が調査区外に続く。SB 5631は壁際の中央付近に焼土・粘土の痕跡が見られ、東壁中央にカマドがあつたものと考えられる。土師器杯・皿・いなか風椀・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。SB 5632のものは、前期前半(斎宮跡標式遺構SE 1800の時期。第2表参照。以下同じ)、SB 5631のものは前期後半(SK 3000の時期)である。SB 5632出土の墨書土器には「坂」がある。

SB 5679・5680も調査区東壁外へ続くものである。新旧関係は埋土の切り合いが不明ではっきりしない。SB 5679には、北壁に焼土・粘土が見られカマドがあつたと考えられる。両遺構からは土師器杯・皿・いなか風椀、須恵器杯・壺・甕が出土している。その他、SB 5679からは土師器台付杯、須恵器横瓶、SB 5680からは土師器壺、須恵器壺も出土している。SB 5679の須恵器杯には「坂己」の墨書土器(60)がある。ともに前期後半代のものである。

SB 5668は、SB 5679の西に位置する。北西をSK 5667に、南をSK 5671に切られている。暗褐色の粘土貼り床が見られるだけで、住居の壁面は不明である。土師器杯・皿・甕、須恵器杯が出土している。埋土の切り合い関係から前期前半と考えられる。

SB 5686・5687は調査区の南西端で重複して検出した。埋土は黒褐色土に黄色土が混入し、

全体に細かい焼土・炭化物を含んでいる。切り合いによる前後関係は不明であったが、北西隅と南端にそれぞれ粘土・焼土が見られ、その床面のレベルの違いから2つの竪穴住居と考えた。遺物は、両者から土師器杯・皿・いなか風椀・高杯・甕、須恵器杯が出土している。前期後半代と考えられる。

S B 5692～5694は調査区の南西隅に重複していた。三者の新旧関係はS B 5692が最も古くS B 5694が最も新しい。土師器杯・皿・いなか風椀・甕、須恵器杯・蓋が出土している。S B 5692・5693は前期前半代、S B 5694は前期後半代と考えられる。

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈 良 時 代	前 期	5631・5632・5668 5679・5680・5686 5687・5692・5693 5694	5639・5640・5642・5650 5667・5678		
	中 期		5618・5625～5627 5645～5647・5651・5657 5660・5661・5664・5666 5670・5671・5673～5675 5677・5682・5688・5699 5702・5705・5707～5713 141・143		5672
	後 期	5622・5643・5644 5648・5669・5722	5613～5617・5624～5635 5641・5656・5659・5665 5700・5703・5706・5714 5716～5718・145		
平 安 時 代	前 期	5681・5720・5723	5600・5662・5663・147		
	後 期	5721	5704	5604～5606・5608	
鎌 倉 時 代	前 半	5719	5619・5623・5630・5636 5649・139・146	5601・5602・5620 136・138・142	
	後 半		5621・5628・5629・5683 5696～5698・5701	5603・5612・5634	5638 5658 5684
室 町 時 代			5637・5654・5655・5676 5685・5689・5690・5695 5715	5607・5609～5611 5633・5652・5653 5691	

第3表 第82次-1次 時期別遺構分類表

土壇は調査区中央に S K 5639・5640・5642・5667・5650がある。

S K 5639・5640は重複しており、前者の方が古い。S K 5639は現状で東西2.6m、南北1.4m、深さ0.3mである。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕が出土している。S K 5640は、東西3.5m、南北4.4m、深さ0.5mである。西壁を奈良時代後期の土壇 S K 5641に切られているほか、中央部を南北に鎌倉時代後半の溝 S D 5612に切られている。土師器杯・皿・いなか風椀・高台付杯・高杯、須恵器杯・蓋・甕が出土している。「椀」の墨書土器(59)がある。

S K 5642は S K 5640の西3m程に位置している。現状で東西2.0m、南北3.2m、深さ0.2mである。S K 5667は S K 5642の南約8mに位置する。東西3.0m、南北2.2m、深さ0.3mの楕円形をしている。S K 5650は、さらに南へ約2.4mの所に位置する。径2.3m、深さ0.4mの円形である。土師器杯・皿・いなか風椀・高杯・鍋・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺が出土した。「椀人」・「坂己」の墨書土器(57・61)がある。これらの土甕のうち、S K 5642・5650・5667は前期前半代、S K 5639・5640は前期後半代と考えられる。

(II) 奈良時代中期の遺構

土壇は主に調査区の南半に見られる。一ヶ所に重複しているものと単独で点在しているものがある。以下、北側の土壇から概述する。

S K 5625～5627は、調査区中央北寄りに位置する。三者の新旧関係は、S K 5625→S K 5627→S K 5626である。S K 5626は東西5.2m、南北4.8m、深さ0.2m、全体に浅い土壇である。中央より北を奈良時代後期の土壇 S K 5624に、さらに鎌倉時代前半の土壇 S K 5623に切られている。S K 5626・5627は S K 5625を掘り下げた後にさらに検出された。S K 5625は、東西4.0m、南北4.4mの楕円形、S K 5627は、2.0mの円形で、いずれも深さ0.5m程である。

S K 5645～5647は、前期の土壇 S K 5642を切り込んでいる。三者の新旧関係は、S K 5645→S K 5646、S K 5647→S K 5646であるが S K 5645・5647の関係は不明である。いずれも径1.0m前後の楕円形で、深さは0.4m前後である。

S K 5618・5688は調査区の西壁外に続く土壇である。S K 5618からは、土師器杯・甕、須恵器甕・長頸壺が出土している。S K 5688からは、土師器杯・皿・いなか風椀・甕・甕、須恵器が出土している。

S K 5651・5657・5660は調査区中央西寄りに点在する。いずれも、1.5～2.5m前後の楕円形で、深さは0.4～0.5mである。

S K 5661・5664・5666・5670・5671・5673～5675・5677は調査区中央から南東よりにかけて重複して見られる。規模は、1.3～2.6m前後の楕円形で、深さは0.3～0.5mである。重複関係にある土壇の新旧関係は S K 5666→S K 5664、S K 5666→S K 5670、S K 5674→S K 5673、S K 5671→S K 5675である。

S K 5702・5705・5707～5713は調査区南よりの一ヶ所に重複している。新旧関係は、S K 5705→S K 5708、S K 5711→S K 5712である。S K 5705・5709～5712は1.0～1.5m前後の楕円形で深さ0.1mであった。S K 5708は東西2.8m、南北2.4mの楕円形、S K 5713は、東西4.2m、南北3.2mの楕円形である。なおS K 5711からは用途不明土製品(66)が出土している。

S K 5699は上記の土壌群のすぐ南にある。東西3.4m、南北3.8m、深さ0.3mの楕円形の土壌である。

S K 5682は調査区の南東隅にあり、さらに調査区外に続く土壌である。現状で東西1.8m、南北4.0m、深さ0.4mである。

S K 141・143は、第8～3次Hトレンチ調査で概に確認されているものである。S K 141は、東西4.1m、南北4.8m、深さ0.3mである。南を室町時代の溝S D 5633によって切られているため確認はできなかったが、2つの土壌が重なっている可能性もある。S K 143は東西4.0m、南北3.8mの楕円形をしており、深さは0.3mである。奈良時代前期の土壌S K 5678、竪穴住居S B 5679を切っている。

上記のうちS K 5651・5657・5671出土の遺物は、古い様相を示しており、斎宮跡の標式遺構S K 1098の時期と考えられる。

井戸S E 5672は中期に埋没している。調査区の中央やや南寄りに位置しており、S K 5666と重なるがS E 5672の方が新しい。遺構検出面で径1.7m前後の円形をしている。検出面より2.4mまで掘り下げたが完掘できなかった。深さ1.0m程から壁面はオーバーハングしている。遺物は土師器杯・皿・いなか風椀・甕・甕、須恵器杯・甕が整理箱で2箱出土した。

(Ⅲ) 奈良時代後期の遺構

今回の調査区ではこの時期になると竪穴住居が姿を消し、掘立柱建物が出現する。S B 5622・5643・5644・5648・5669・5722である。その規模は、S B 5622が3間×3間の総柱建物、S B 5644・5669・5722が3間×2間の南北棟、S B 5643が3間×2間の東西棟、S B 5648は調査区東へ続くが3間×2間の東西棟と思われる。柱通りの方向は、6棟とも北に対して西へ16°前後振れている。柱掘形は0.5～0.8mの隅丸方形あるいは円形をしている。柱間は、S B 5622・5643・5644が1.4～1.6m、他は1.8～2.3mである。

土壌はS K 5624が上記S B 5622と重複するほかは、全て掘立柱建物の見られない調査区西側に点在する。北からS K 5613～5617・5635・5641・5659・5656・5665・5714・5716・5703・5706・5717・5700・5718である。S K 5617・5635は調査区外へ延びるため不明であるが、大旨規模はS K 5616・5624・5714が1.3～1.5mの楕円形で、他は0.7～0.8mのほぼ円形である。いずれも、土師器・須恵器の杯・皿・甕などが出土している。特にS K 5700は、東西2.5m、南北1.6m、深さ0.3mの楕円形の土壌で、ここから出土した土師器皿の底部外面に「水司鴨三」のへら描

き土器(56)があり注目される。

(Ⅳ) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物は調査区の南東隅に3棟ある。S B 5720・5723は重複する南北棟の建物である。S B 5720は3間×2間であるが、S B 5723はさらに調査区外へ続き規模は不明である。いずれも柱掘形は0.5m前後の丸形である。柱通りの方向は北に対して東へ8°振れている。柱間は桁行約1.9m、梁行約2.0mである。おそらく両者は建て替えられたものであろう。S B 5681は調査区外へ続く建物で妻柱は確認されていないが、3間以上×2間の東西棟である。いずれの建物も柱掘形の遺物からは、平安時代前期としか確認できなかった。

土壌は調査区の中央付近にS K 5600・5662・5663が重複しており、南東隅に第8-3次Hトレンチ調査で検出されているS K 147がある。いずれも平安時代前II期(標式遺構S K 2650の時期。第2表参照)に相当する土壌である。S K 5600・5662・5663の新旧関係はS K 5662が最も古くS K 5600が最も新しい。遺物には時期差はない。特にS K 5600からは、完形あるいはそれに近い土師器杯・皿・甕、黒色土器椀・甕、灰釉陶器椀・皿・把手付水注が出土している。特殊なものとして底部外面に「藤長」の墨書の見られる土師器杯(54)、「清」と墨書された灰釉陶器皿(62)などのほか、鉄製品として刀子(53)が出土している。

(Ⅴ) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物S B 5721は、前期のS B 5720・5723と重複している。規模は3間×2間の東西棟である。柱掘形は0.5mの丸形。柱間は桁行2.0m、梁行2.2mである。

土壌S K 5704は、奈良時代中期の土壌が重複していた調査区中央北寄りに位置している。東西1.0m、南北1.6m、深さ0.2mの不整形な土壌である。土師器・須恵器の杯・甕のほか、口縁端を一部分欠くがほぼ完形の近江産の緑釉陶器椀(65)が出土している。

溝は調査区の北端に東西溝S D 5604～5606・5608の4条がある。いずれも幅0.4m前後、深さは遺構検出面から0.5m前後である。溝底のレベルは西の方が東より低い。新旧関係の確認できるものは、S D 5605→S D 5604、S D 5606→S D 5604である。また、S D 5605はS D 136に、S D 5604はS D 5602に北側の溝肩部を切られている。いずれも土師器杯・皿・高杯・鍋、ロクロ土師器の杯・皿などが出土している。

(Ⅵ) 鎌倉時代前半の遺構

掘立柱建物は調査区南外側へ続くS B 5719がある。東西5間×南北3間以上の規模の総柱建物である。柱掘形は0.3m程で丸形である。平坦な川原石を根石としている。柱間は南北2.0m、東西1.6mである。

土壌はS K 5619・5623・5630・5636・5649・139・146がある。S K 5636・5649は調査区の西壁外に続く。S K 5619は東西1.6m、南北2.8mの不整形な土壌である。S K 5630は1.0m前後の

楕円形をしている。S K 139・146は第8-3次Hトレンチ調査で概に確認されているが、S K 146の西端下層では奈良時代中期の土壌S K 5675が確認された。調査区中央北寄りにあるS K 5623は、奈良時代の土壌S K 5624~5626の上層で確認したもので、東西3.0m、南北1.9m、深さ0.2m前後の楕円形の土壌である。床面・壁面ともに暗茶褐色粘土で固くしまっている。いずれの土壌からも土師器皿・鍋、山茶碗などが出土している。

溝は東西溝5条、南北溝1条がある。調査区北端にはS D 5601・5602・136・138がある。S D 5602とS D 136は当初は一本の溝と思われたが、西端から9mの地点で3m程途切れていることが確認された。S D 5601は幅0.5~0.7m、深さ0.6m前後、溝底レベルは西の方が低い。S D 5602は幅1.0m、深さ0.9m前後、溝底レベルは東の方がやや低い。S D 136は、幅1.2~1.4m、深さ0.7m前後、溝底レベルは西の方が低い。S D 5601とS D 5602の新旧関係はS D 5601の方が古い。いずれも、土師器皿・鍋、山茶碗などが出土している。

S D 142は調査区のほぼ中央にある東西溝である。幅1.3m、深さ0.4m程であるが溝底レベルは西の方が0.1m程低い。なお、この溝は、第8-2次調査区南西端まで続くことを確認している。土師器皿・鍋、山茶碗のほか、石硯(68)が出土している。

S D 138・5620はいずれも細く浅い溝で土壌あるいは擾乱によって削平を受けている。

(Ⅷ) 鎌倉時代後半の遺構

土壌はS K 5621・5628・5629・5683・5696~5698・5701がある。S K 5683は調査区西壁外へ続き規模は不明である。S K 5621は東西1.0m、南北3.2mの細長い土壌である。その他の土壌は1.5~2.0mの不整形な土壌である。

溝はS D 5603・5612・5634がある。S D 5603は、調査区北端にありS D 5604・5605を切っている。幅0.4m前後、遺構検出面からは0.7m程下がっている。溝底レベルは西の方が0.1m程低い。S D 5634は調査区中央北寄りに位置する東西溝で約8m分を確認したが、さらに西へ続く。S D 5612は、調査区中央を南北に走り、北で東に折れる溝である。幅0.6m前後、深さ0.2m程である。土師器皿・鍋、山茶碗が出土している。

井戸は調査区中央西寄りに点在する。S E 5638・5658・5684がある。S E 5638は、室町時代の溝・土壌が重複する中にあり、S K 5637を下げた後に検出した。検出面で東西1.2m、南北1.4mのほぼ円形である。底までの深さは検出面より1.8mである。底は0.6mの円形をしている。竈宮跡で検出される井戸は通常4~5mの深さであることを考えると、例えば水溜のような機能をもつものであったかも知れない。土師器皿・鍋・壺、山茶碗、白磁碗が出土している。山茶碗の中には底部外面に「上」の墨書が見られるものが1点ある。

S E 5658は検出面で東西1.2m、南北1.4mのほぼ円形で、S E 5638とプランは同じである。検出面より2.8mまで掘り下げたが完掘はできなかった。土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗・山皿

が出土している。

S E 5684は一部調査区の西壁にかかっているが、検出面で東西1.4m、南北1.7mである。検出面より1.0m程掘り下げたが完掘はしていない。土師器皿・鍋が出土している。

(Ⅷ) 室町時代以降の遺構

土壇はS K 5637・5654・5655・5676・5685・5689・5690・5695・5715がある。このうちS K 5637は、東西3.4m、南北20mの範囲にわたり、土壇と溝が重複している。全体としてS K 5637としたがその中にS D 5652・5653、S K 5655を包摂している。大略検出面より0.4m程の深さであるが部分的に0.6m程下がる所もある。出土遺物には、土師器皿・伊勢型鍋・羽釜がある。S K 5685・5689は、調査区西外側に続くものである。S K 5685の下層には、S E 5684がある。S K 5685からは、土師器皿・伊勢型鍋が出土している。S K 5689からは、上記のような日用雑器のほか白磁・施釉陶器も出土している。

S K 5690はS K 5689のすぐ西に位置する。東西3.0m、深さは0.1mと浅い。暗黒褐色土の埋土には細かい焼土・炭化物を多く含んでおり、床面は固くしまっている。土師器皿・伊勢型鍋、施釉陶器、土鍾が出土している。この土壇の西側にS K 5695・5715・5676がある。いずれも2.0～2.5mの楕円形をした土壇で深さは0.2mと浅い。S K 5715は、東壁に焼土と炭化物が見られたが、東側からこの土壇内に捨てられたような状況を示していた。

S K 5655は東西0.8m、南北1.0m、深さ0.4mの小さな楕円形の土壇である。土師器皿、鉄釉小壺(64)が出土している。そのすぐ北東にS K 5654がある。S K 5637と重複しているが現状では東西2.0m、南北4.4m、深さは0.1mと浅い。

溝はS D 5607・5609～5611・5633・5652・5653・5691がある。S D 5633は、幅0.8m、深さ0.2mの浅い東西溝で、溝底レベルは西の方が低い。第84-2次調査では確認されていないので途中で止まってしまうか、南北のどちらかに曲がるのであろう。その他の溝も同ような浅い溝で、土師器皿・伊勢型鍋が出土している。

(Ⅸ) 遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約300箱ある。奈良時代前期から室町時代に至るまでの各時期の遺物が見られる。その中でも特に奈良時代の遺物が多い。ここではまとまった遺物が出土している主な遺構の遺物について概述したい。

奈良時代前期の竪穴住居S B 5632からは土師器杯・蓋・皿・いなか風椀・高杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が整理箱で3箱分出土している。斎宮跡様式遺構のS D 1800の時期(第2表参照)である。

土師器杯には、精良な胎土を持ち、色調は赤褐色を呈する精製土器(6～8・10～12)と粘土に砂粒が混じり、色調は暗褐色や乳褐色で、口縁部のみヨコナデを施す粘土ひも巻き上げ痕

跡の残る粗製のもの（1～5）とがある。後者はいわゆる“いなか風椀”と呼ぶものである。

（6）は口径11.2cm・器高2.9cmで底部外面は指押さえナデ、口縁部はヨコナデするものである。胎土・色調は調整土器であるが、調整手法はいなか風椀と同じである。（7）は口径13.4cm・器高3.2cmで明褐色、（8）は口径14.2cm・器高3.5cmで赤褐色、いずれも底部外面のヘラケズリは口縁部下半まで及んでいる。（10・11）は脚が付く杯であるが、（10）は口径14.6cm・器高4.4cm、口縁部内面に放射状暗文、外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施される。

（11）は口径16.2cm・器高4.0cmと、やや大きくなり、底部内面に1条の螺旋状暗文、外面はヘラミガキが施される。（12）は口径16.8cm・器高5.6cmとさらに大きく深くなる。底部内面に3条の螺旋状暗文、口縁部内面に放射状暗文、外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施される。いなか風椀（1～5）は口径10.8cm・器高4.0cmで口縁端部がやや外反する（1）、口径11.5～11.8cm・器高3.5cm前後で口縁端部はまっすぐ丸くおさまる（2・4）、口径12.0～12.6cm、器高4.0cm前後で口縁端部はやや内湾する（3・5）がある。（5）の底部外面には「×」がヘラ描きされている。

土師器蓋（9）は外面にヘラミガキが施され、内面の中央には、布目の痕跡が見られる。

土師器皿（18～21）には、口径21.6～22.6cm・器高2.7cmで口縁部が内湾ぎみに丸くおさまる（18～20）と口径22.8cm・器高3.2cmとやや深くなり口縁端部に面をもつ（21）とがある。

（18）はb手法、（19・20）は外面にヘラケズリの後ヘラミガキを施し、内面は放射状暗文と螺旋状暗文を（19）は2条、（20）は3条施している。（21）は、外面のヘラケズリ、ヘラミガキが口縁部近くまで及び、内面は放射状暗文が3条施されている。

土師器高杯（22）は脚部がほぼ完存であるが杯部はほとんどない。わずかに螺旋状暗文が認められる。

土師器甕には、球形で中型の（23）と大型の（24）がある。

須恵器は土師器に比べると出土量は少ない。杯（16・17）・杯蓋（13～15）がある。

平安時代の遺物はS K 5600からまとまった土器が出土している。土師器杯・皿・甕・鉢・鍋、黒色土器椀・甕、灰釉陶器椀・皿・把手付水注、刀子が整理箱で13箱分出土している。

土師器杯には、底部外面を指先でナデツケ、口縁部をヨコナデするe手法によって調整される（25～30）と脚が付き底部内面に1条の螺旋状暗文、口縁部内面は放射状暗文、外面は口縁端部近くまでヘラミガキを施す（31）とがある。（25～28）は口径14cm前後・器高3cm前後であるが、（29・30）は器高が3.5cm前後とやや深くなり、口縁端部に面をもつ。

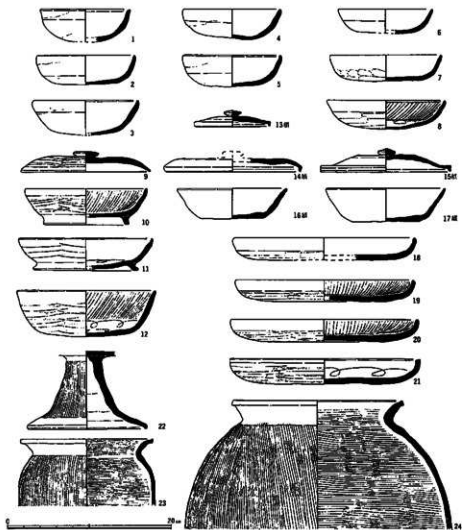
土師器皿は杯同様にe手法で調整されるものである。底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となる（32～34）、底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部が外反する（35・36）がある。

黒色土器は内面のみ黒色のA類が出土している。椀（37・38）は底部及び口縁部外面をすべ

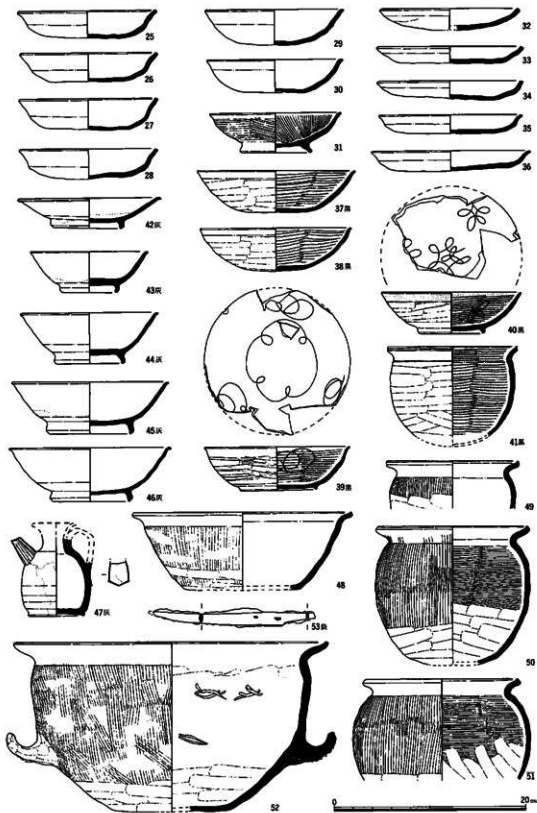
てヘラケズリし、内面は丁寧にヘラミガキされ、みこみ部分には螺旋状暗文が見られる。碗(39・40)は小さな三角形の高台が付き、外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施され、内面は丁寧にヘラミガキされ、さらにその上に螺旋状の暗文が描かれる。甕(41)は底部を欠き外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。口径13.4cm・推定器高10.5cmの中型の甕である。

土師器甕(49~51)は外面の体部の上半を縦方向にハケメを施し、体部下半から底部をヘラケズリするものである。ほぼ球形に近い中型の甕である。

その他、土師器には鉢(48)・鍋(52)があるが、(52)の内面には意味不明のヘラ記号が施されている。



第3図 第82次出土遺物 SB5632; 1~24



第4図 第82次出土遺物 S K 5600 ; 25~53



第5图 第82次出土文物 SK5800: 54·55·62, SK5700: 56, SK5650: 57·61, SB5632: 58·63, SK5640: 59, SB5679: 60, SK5655: 64, SK5704: 65, SK5711: 66, SD142: 68, SK5735: 71, 7LP11: 70, 包舍厝: 67-68-72(70~72是1:2)

灰釉陶器には、椀(43~46)・皿(42)・把手付水注(47)がある。黒笹90号窯期の時期に相当するものである。椀・皿は、体部下半近くから底部をヘラケズリし、内外面をハケ塗りするもので底部みこみにもハケ塗りが見られる。高台はすべて三日月高台である。



その他、鉄製品では刀子(53)が出土している。現状で刀長身13.7cm・茎長3.3cmである。一部に木質が残っている。


また、このS K 5600からは、土師器杯の底部外面に「藏長」と墨書された土器(54)なども出土しているが、特殊遺物としてまとめて述べる。

特殊な遺物には、墨書土器30点、ヘラ掻き土器5点、緑釉陶器190点(うち陰刻のあるもの3点・緑釉緑彩1点)、円面硯3点、土馬2点、鉄製品20点、石硯2点、石帯1点、砥石7点、石鍋3点、たたき石1点、不明土製品1点、フイゴの羽口3点、瓦4点、ミニチュアの土師器埴1点などがある。

墨書土器は、今回の調査で注目される資料が出土している。

平安時代前Ⅱ期(S K 2650の時期)のS K 5600からは、土師器杯底外面に「藏長」・「藏」と墨書された土器(54・55)が出土している。これらは『類聚三代格』に見られる齋宮寮の役所のうち「藏部司」を裏証する資料となる。藏部司は出納事務を行った役所で、「長」という文字はその中での地位を表すものと想像される。他にこの土壇からは、「清」と墨書された灰釉陶器皿(62)も出土している。

奈良時代前期のS K 5650から出土した土師器杯(57)には、底部外面に「椋人」という墨書がなされている。そしてその左には、一筆書きで「」という記号のようなものが書かれている。さらにこの土壇から北西へ12mのところにあるS K 5640出土の土師器杯と思われる破片(59)にも木匱の文字、その左に(57)と同様の記号が書かれており、またS K 5650から21m北東にあるS B 5632出土の土師器高杯(58)の内部にも木匱の文字とその上には上記の記号墨書が見られる。「椋人」を人名とするば「」はその人のシンボルマークだったのではなかろうか。類例としては、静岡県袋井市坂尻遺跡出土の墨書土器の中に「千山」と書かれた人名と思われる墨書の上方から右にかけてゼンマイ印が書かれているのが知られる。

S B 5679出土の須恵器杯(60)の底部外面には、「坂己」という墨書が見られ、その左にも「」といった記号が見られる。これも同じような例ではなかろうか。なおS K 5650出土須恵器杯(61)にも「坂己」、S B 5632出土須恵器杯(63)に「坂」の墨書が見られる。

相互にわずかに21m離れているにすぎない同時期の遺構S B 5632から「椋」と「坂」の墨書、S K 5650から「椋人」と「坂己」の墨書と同じ組合せで出土しているのは単なる偶然であったとは考え難い。

その他の墨書土器には、S E 5638から出土した山茶碗底部外面に「上」の墨書、包含層出土

の灰釉陶器碗の底部外面に「仁」の墨書が見られる。

S K 5700から出土した土師器皿の底部外面には「水可鴨三」とヘラ描きされたものがある。今回の調査地より約600m北東で昭和56年に行われた第37-4次調査で「水可鴨口」のヘラ描き土器が出土しているのに続き2点目である。

石硯には、包含層出土の(67)とS D 142出土の(68)がある。(67)は楕円硯で(68)は自然石を利用した風字硯になるものと思われる。

石帯(72)は、1辺2.8cmの巡方で現状は約2分の1である。巡方としては3点目である。

円面硯3点は同一個体と考えられる。(69)のように長方形の透かしの間の部分に円形の穴があいている。

ミニチュア土器には、土師器埴(70)がある。推定口径6.8cm・器高2.6cmである。

(66)は、奈良時代中期のS K 5711から出土しているもので、内面はヨコハケメ、外面と側面はタテハケメの後ヘラケズリとナデで調整している。用途不明の土師器である。

(B) 第82-2次調査(6 A D I-K・L)

(I) 奈良時代中期の遺構

土壇S K 5731は調査区の西外側へ続くものである。深さ0.2m程の浅い土壇である。土師器杯・皿・甕・薬壺、須恵器杯・蓋・甕が出土している。

(II) 奈良時代後期の遺構

竪穴住居S B 5743は調査区の東よりにある。調査区の南外側へ続くため全体の規模は不明だが、東西3.4m、南北2.8m以上、棟方向は東で北に22°振れる。深さは0.2mである。周溝・カマドの跡は見られない。土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

据立柱建物は2棟ある。S B 5734はおそらく5間×2間の南北棟、S B 5738が3間×2間の東西棟である。どちらも0.6~0.8mの丸形の柱掘形をもつ。棟方向は、第82-1次調査で確認しているこの時期の建物が北で西へ16°振れているのに対し、これらは0°あるいは北で西へ4°

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈良時代	中期		5731		
	後期	5734・5738・5743	5732・5733・5736・5741 5745・5748・5749		
平安時代前期		5737		5744	
鎌倉時代	前半		5735・5740	5746・5747・142	
	後半		5739・5742		

第4表 第82-2次 時期別遺構分類表

振れるという違いがある。

土壇は西からS K 5732・5733・5736・5741・5745・5748・5749がある。規模の確認のできるのは、S K 5732・5733・5745だけで他は調査区外側へ続く。S K 5732・5733は調査区西端にあり、どちらも一辺3.5m前後の不整形で、深さは0.2mと浅く、いずれも土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕がそれぞれ整理箱で2箱分出土している。特にS K 5733からはミニチュアの須恵器蓋が出土している。

(Ⅲ) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物は調査区の中央で北側外へ続くS B 5737がある。3間以上×2間の南北棟の建物である。柱間は桁行1.4m・梁行2.0mである。棟方向は北で西に3°振れている。

溝は南北溝S D 5744がある。幅約0.6m、深さ約0.1m、方向は北で東へ11°振る。

(Ⅳ) 鎌倉時代前半の遺構

土壇はS K 5735・5740がある。S K 5740は調査区南外側へ続き規模は不明だが、S K 5735は東西2.0m、南北1.0m、深さ0.2mの土壇である。

溝は第82-1次調査で検出されているS D 142が調査区の南西隅にわずかに肩部がかかっている。南北溝S D 5746・5747は幅1.5m、深さ0.2m、方向は北で東へ3°振り、2.5mの間隔を置いて並行する溝である。溝の間が道路でS D 5746が西側溝、S D 5747が東側溝と考えられる。山茶碗、土師器杯・伊勢型鍋が出土している。

(Ⅴ) 鎌倉時代後半の遺構

土壇S K 5739は、1.4mの楕円形、S K 5742は一辺約2.0mの隅丸方形である。深さはS K 5739が0.3m、S K 5742は深さ0.1mである。

(Ⅵ) 遺物

奈良時代中期から室町時代に至るまでの各時期の遺物が出土している。まとまった遺物が出土しているのは、奈良時代中期の土壇S K 5731、奈良時代後期の土壇S K 5732・5733である。それぞれ整理箱で2箱分の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕などが出土している。S K 5733からは推定径4.9cmのミニチュアの須恵器蓋(71)が出土している。その他、特殊な遺物としては緑釉陶器が18点(うち除刻のあるもの1点)、フィゴの羽口2点、鉄釘1点、鉄斧1点がある。

(C) まとめ

冒頭にも述べたように史跡東部で確認されている東西の区画溝S D 291が今回の調査区まで延長できるかどうか調査の目的の一つであった。

調査の結果は、S D 291の延長線上に幅1.0m、深さ0.9mのしっかりした溝S D 5602とS D

136を検出した。しかしながら、これらの溝の最下層に含まれる遺物は鎌倉時代前半のもので、この時期以降に埋没したものと考えられる。史跡東部に見られる区画溝の埋没の時期は、場所によって様々であり、S D291についても第51次調査では平安時代前Ⅱ期に比較的短期間に埋まっているが、第80次調査では鎌倉時代前半に完全に埋まっているなどの差がある。今回検出した溝も埋没の時期を確認したのみで、溝の掘られた時期については不明である。

東調査区は南北の区画溝の想定地に設定した。しかしながら、検出した溝は鎌倉時代前半に埋没した南北溝S D5746・5747である。また、これらの溝の方向は北で東へ3°振れており区画溝の方向と一致しない。

以上のような結果を得た方が方形地割の有無にまでの結論を出すには到らなかった。今後の周辺地域の調査が進むことにより解明されることが期待される。

今回の調査では、奈良時代後期の掘立柱建物S B5622・5643・5644・5648・5669・5722の6棟が検出されているが、すべて棟方向は北で西に16°振っている建物である。このうち、S B5643・5644は、東西棟と南北棟と棟方向の違いはあるが建て替えと考えられる。従来からこの地域で検出されている掘立柱建物は、棟方向が北で東に振る建物が多かった。これは奈良時代前期から後期に至る溝S D170の影響を受けているからである。今回、従来とは違った建物群が確認されたことは注目される。

遺物については、墨書・ヘラ描き土器に注目される資料がある。

まず、「水司鴨三」のヘラ描き土器は、奈良時代後期の土師器皿の底部外面にヘラ描きされたものである。第37-4次調査で出土している「水司鴨□」のヘラ描き土器について2点目である。これは「水部司」の存在を実証して文献資料を裏付けただけでなく、さらに「宮内省主水司」に歴代関与する鴨氏一族が、中央官制と同様に「水部司」に派遣されていたことを実証している。どちらも焼成前にヘラ描きされたものであるが、筆跡がやや異なるようにも考えられる。

「水部司」に関連する資料については、従来「水司」・「鴨」の墨書土器が出土しており、資料としては4点目になる。これらの資料はそれぞれがかけ離れた場所から出土している。「水部司」は水や氷を管理調達する役所であるので、当然のことながら管理していた井戸があると考えられる。ところが、斎宮のような台地上では水脈の問題があり、どこにでも井戸を掘って「水部司」を配置したとは考え難い。さらに、今回を含め4点の資料が見つかった調査地では、資料と同時期の井戸や関連する遺構は確認されていない。土器は持って運ばれる事を考慮すれば、墨書・ヘラ描き土器の出土により、ただちに役所の位置を想定することは限度があると言えよう。

「藏部司」を実証する資料として「藏長」・「藏」の墨書土器が初めて出土した。平安時代前

Ⅱ期の土師器杯の底部外面に墨書されていたものである。この時期は、史跡東部の地域に計画的な建物配置が行われ、斎宮寮が存続していた頃である。その中心から離れるこの地域で出土している点、さらに、同遺構から出土している遺物には完形品が多く、通常の廃棄によるものではない点、『藏部司』に関連する遺構が確認されていない点などに疑問が残る。これらについては、史跡西部の古里地区から史跡中央部の宮ノ前地区まで総延長 730 m にも及ぶ事が確認されている溝 S D 170 が、奈良時代から平安時代に至るまで史跡中・西部における地割りに影響を与えている事から史跡東部とは異なった規格で造営が行われていたためという想定もできる。しかしながら、これまで史跡中央部では平安時代初期から前期の掘立柱建物は 40 棟にしかすぎず、西部を加えても東部の 5 分の 1 に満たない。また、S D 170 が、史跡東部の区画溝とどのような関係になるのかも解明されておらず、今後、史跡中央部の調査の進展が望まれる。

Ⅲ 第83次調査(6AFJ-C~F・西加座地区)

第83次調査を9月12日から史跡東部、通称中町裏の字西加座2770-3番地で実施した。現況は畑地である。過去の調査結果から、史跡東部には道路・側溝(区画溝)によって一辺120m(一部130m)の方形区画の存在が判明している(第2図参照)。当該調査地はその方形区画のF5ブロックの南西部にあたる。

周辺では、北側で第21-14次調査(昭和53年度)、西側では、第13-8・9次調査(昭和51年度)を実施している。現道を挟んだ東側では第34次調査(昭和55年度)、第53-15次調査(昭和59年度)、第58-1次調査(昭和60年度)を実施し、平安時代前半代の掘立柱建物33棟を検出している。また、現道を挟んだ南側のF6ブロックで実施した第44次調査(昭和50年度)では、平安時代前期の掘立柱建物5棟、掘立柱塀列3条などを検出している。特にこの掘立柱塀列は上記の道路・区画溝の方位に合致し、これがある種の施設を取り囲むものならば、この地域は斎宮跡の中枢部を考える上で重要な場所ではないかと推測された。第83次調査は、その重要な地域内の状況を把握する目的で実施した。

調査区は南北33m、東西38mで、更に東西の区画溝を検出するため、南側に長さ40m、幅4mの南北トレンチを設定した。調査面積は約1,400㎡。遺構は床土(茶褐色土)直下の黄褐色土

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
平 安 時 代	初期	5780・5800・5810 5820・5835 5806(SA)5840(SA)	5783・5785・5834・5841	5792・5793・5794 5822・5823・5824 5858・5832	
	前I期	5808・5812・5815 5830	5782・5784・5786・5831		
	前II期	5787・5789・5807 5818・5829・5845 5846・5853	5790・5791・5801・5805 5811・5826・5848・5849 5852・5854	5795・5809・5851 ※(5798・5819)	5850
	中期	5788・5797・5799 5802・5827・5828 5847		5803・5833	
	後I期	5781・5796・5813 5814・5816	5804・5836・5838・5839	5837 ※(5843・5844・ 5856)	
鎌倉時代			5821・5825		
不 明			5855・5857・5859		

※()は、同時期の中でI期かII期か不明なもの

第5表 第83次 時期別遺構分類表

の地山上で検出した。その深さは北で0.2m、南で0.4mと北から南に向かって傾斜している。検出した主な遺構は、平安時代を中心とし、掘立柱建物31、掘立柱塼2、土壇22、溝24、井戸1である。

(I) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物5、掘立柱塼2、土壇4がある。

掘立柱建物S B 5780は調査区中央北側で検出した4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.8mと比較的大型で、遺存状況の良い柱穴においては建物の内側から外に向かって柱抜き取り痕を検出している。また西・南・東の3方で雨落ち溝S D 5792～5794を検出した。幅0.4m、深さ0.2～0.4m。それぞれの柱列からこの溝までの距離は1.8mである。北側は現道の下に当たるため確認できなかったが、雨落ち溝は四周を巡ると推定される。南東隅は平安時代前II期のS K 5790によって削平を受けているが、南西隅ではこの雨落ち溝が完全に途切れていることが判明した。なお、このS B 5780の南桁行柱列から南へ2.9mの位置で東西4間分の掘立柱塼S A 5806を検出した。柱間も柱通りの方向もS B 5780と全く同一である。目隠し用の塼である可能性が考えられる。

S B 5820はS B 5780の南東に位置する4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.6mでS B 5780と大差はない。北側を除く三面で雨落ち溝S D 5822～5824を検出した。溝は幅0.4m、深さ0.3mである。北面には溝はなく、西側の一部や南東・南西両隅は途切れている。

S B 5800と5810はS B 5780に南接し、ほぼ同じ位置にある5間×2間の東西棟で、新旧関係は埋土の切り合いからS B 5780→5800→5810である。S B 5800は南面に廂を持つ。柱掘形は、幅0.6m、長さ1.5～1.7m、深さ0.2mのほぼ長方形に近い掘形の両端を更に0.8m掘り込み、2柱穴分の柱掘形とする、いわゆる溝持ち掘形である(第6図)。S B 5810の柱掘形は一辺0.6m、深さ0.5mである。建物の位置から推測すれば、S B 5800及びS B 5810はS B 5780の建て替えと考えられる。S B 5835は調査区南東に位置し、後述する掘立柱塼S A 5840の雨落ち溝S D 5832より新しい4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5m、深さ0.5mである。

掘立柱塼S A 5840は、発掘区の南側で東西に13間、西側で南北に4間分を検出した。柱掘形は一辺0.8m、深さ0.4m。柱間は2.96mで、これは第44次調査(F6ブロック)で検出のS A 1411・2675と同じ柱間である。更に塼の外側1mのところを並走する幅0.4m、深さ0.3mの雨落ち溝S D 5832を検出した。かつて西側の第13-8・9次調査で一部検出した同様の南北溝に着目すれば、S A 5840は調査区の西端で北へ曲がると推測されたため、6mおきに宅地の境界まで小トレンチを設定した結果、更に4間分を確認することが出来た。

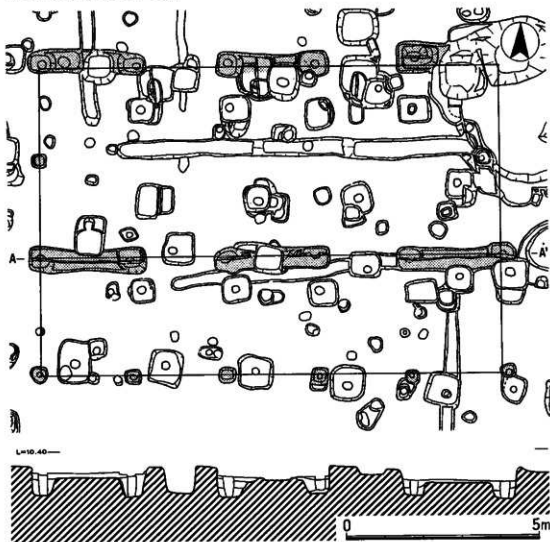
S K 5783・5785は調査区西北部にある重複する土壇で、切り合い関係から言えばS K 5785の方が新しい。長径2.5～3.0m、短径1.5～2.5m、深さ1.0mの不整楕円形を呈する。遺物の量はS

K 5783・5785を合わせても整理箱に1箱分と少ない。S K 5841は、平安時代前II期に埋没したS E 5850と重複する東西16.0m、南北8.0m、深さ0.1mの大型の長方形土壇である。ここからは遺物がほとんど出土しなかったため不明な点が多い。

S D 5858は南北トレンチ中央部南寄りで検出した幅1.0m、深さ0.2mの東西溝である。東西を区画する道路の北側溝に当たる。出土した遺物は少ない。

(II) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物12、土壇14、溝5、井戸1がある。この時期は更に前I期、前II期に分けられる(第2表)。なお、溝S D 5798・5819に関しては、出土した遺物からは平安時代前I期か前II期かを判断することはできなかった。



第6図 掘立柱建物S B 5800遺構平面図 (1:100)

(a) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物S B5815は5間×2間の東西棟で、南面と東面に廂を持つ。柱掘形は、一辺1.0m、深さ0.4m。柱通りの方向はE3°Sである。これは従来平安中期の建物に多くみられた棟方向で、当該時期に比定される建物としては珍しい例といえる。S B5830はS B5815の南10mにあり、規模は同じく5間×2間の東西棟である。南面と北面に廂を持つ。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.3m、柱通りの方向はE3°Sである。S B5815と同時期に存在した可能性もある。S B5812は、S B5815の東側で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.5mで、3間×2間の東西棟S B5808より古い。柱通りの方向はE4°Nである。

S K5831はS B5830より古いもので、長径2.0m、短径1.0m、深さ0.2mである。遺物は整理箱に約2箱で、猿投窯産の緑釉陶器が2点出土している。S K5782・5784・5786は調査区西北部で検出した。S K5782は、長径4.5m、短径3.5m、深さ1.0m。遺物は整理箱に2箱出土している。S K5784はS K5782より古いもので、長径3.0m、短径2.0m。S K5786は撿乱によって壊されているが、長径2.3m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。

(b) 平安時代前Ⅱ期の遺構

調査区南東隅で検出の掘立柱建物S B5845・5846は重複するもので、ともに5間×2間の東西棟である。埋土の切り合いによる新旧関係はS B5845→5846である。柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5mで、柱通りの方向は前者がE5°N、後者がE3°Nである。両棟は同位置に建て替えられた可能性がある。S B5829は調査区南西にある3間×2間の東西棟で、柱通りの方向はE1°Nを示す。S B5787・5789・5807・5818は調査区北東部で検出された。S B5789は4間×2間の南北棟、S B5807は5間×2間の東西棟、S B5818は3間×2間の東西棟であることが確認された。

土壇S K5790・5791・5801・5811は、調査区北東部に位置する。S K5790は、長径5.0m、短径3.0m、深さ0.7m。遺物は整理箱に土師器が69箱、須恵器・灰釉陶器が4箱、製塩土器が2箱の計75箱である。土師器杯・皿・鍋・甕・鉢・甌、須恵器杯・壺・甕、灰釉陶器碗・皿・段皿・耳皿、緑釉陶器皿・椀など様々な器種がそろっている。S K5801をS K5791の下で検出した。径約2.0mの円形で、深さは0.5m。遺物は整理箱にして約20箱ある。S K5811は径約1.0mの円形で、深さ0.3m。また、S K5848は調査区南東部にある一辺約1.0mの隅丸方形土壇で、深さ0.2m。人頭大の礫と共に甕や須恵器杯・甕片、土師器鍋などが出土した。S K5826は調査区南西隅にあって南北5.0m、東西2m以上の長方形を呈する。深さは0.1m。遺物は整理箱で約1箱出土した。調査区南東隅のS K5849は、S B5845・5846よりも古いもので、東西3.0m×南北1.0mの不整形円形を呈する。同じく、S K5852は南北2.5m、東西0.8m以上、深さ0.5m。またS K5854は長径4.0m、短径1.0m、深さ0.1mで、いずれも遺物は整理箱で約1箱出土したに過ぎない。

溝S D5809はS B5800と重複するもので、幅0.4m、深さ0.2m、長さ5.0mにわたり検出した。

少量の土師器片が出土した。S D5851はS K5848より新しい溝で、幅1.0m、深さ0.2m、長さは7.0m以上あり、土師器杯・皿・高杯・鍋、製塩土器などが出土している。

井戸S E5850は、調査区中央南端で検出した円形の素掘りの井戸である。上面では径約3.0×2.8mであるが、深さ0.5mの所からは径1.7mになる。深さ約2.0mの所から壁面が1.0mほどオーバーハングしているため、安全対策を講じて完掘した結果、底までの深さは約4.5mに達した。埋土は、上層：暗黒色土、中層上部：暗黒褐色土、中層下部：暗褐色土、下層：暗褐色砂質土となっている。ここから出土した遺物は整理箱にして約70箱に達した。この井戸の埋没時期は平安時代前Ⅱ期であるが、井戸の使用時期は前Ⅰ期もしくは初期まで遡ると考えられる。

(Ⅲ) 平安時代中期の遺構

掘立柱建物S B5788・5797・5799・5802は調査区北東部にあり、このうちS B5788は5間×2間の南北棟、S B5802は3間×2間の東西棟、S B5799は北半が調査区外に延びるため規模不明である。S B5827・5828は共に調査区南西隅にある。南北柱間2間分を検出したのみである。遺構の切り合いから、S B5827はS B5828の建て替えと考えられる。柱通りの方向はE4°Sである。調査区南東隅のS B5847は、4間目の柱穴が発掘区外になるが、恐らく4間×2間の規模と考えられる。柱通りの方向はE4°Sである。

溝S D5803は調査区の北東隅にあり、長さ5.0m、幅0.5m、深さ0.1m。S D5833は長さ9.0m、幅0.8m、深さ0.1mの比較的浅い溝である。共に遺物は土師器片が少量出土しただけである。

(Ⅳ) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物5、土壇4、溝4を検出した。大半は後Ⅰ期のものであるが、後Ⅰ期か後Ⅱ期か判別不明なものにS D5843・5844・5856がある。

掘立柱建物S B5781は4間×2間の南北棟で、柱掘形は一辺0.4m、深さ0.2mの円形を呈する。柱通りの方向はN1°Eである。S B5814はS B5813とほぼ同じ位置にあるが、遺構の切り合い関係がなく、両者の新旧関係は不明である。規模は4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.6mの隅丸方形で、深さは0.5mである。柱通りの方向はE3°Nである。S B5816は発掘区のはほぼ中央で検出された。3間×2間の南北棟で、柱通りの方向はN4°Eである。南側梁形の柱穴は鎌倉時代の溝S D5821に削平されている。

S D5837は発掘区の南西隅から東方向に延びる幅0.8m、深さ0.2mの溝である。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器杯・皿、灰胎陶器碗・皿など整理箱にして2箱分が出土した。

時期の細分できないもののうち、S B5813は5間×2間の東西棟で、一辺0.4m、深さ0.2mの楕円形の掘形を持つ。柱通りの方向はE3°Nである。S D5843・5844は発掘区南方中央から南北のトレンチにかけて長さ40mにわたり検出した。幅0.4m、深さ0.1mである。

(V) 鎌倉時代の遺構

この時代の遺構は少なく、S D 5821・5825だけであった。前者は鎌倉時代前半のものである。S D 5821は長さ約18.0m、幅約1.0m、深さ0.1mである。埋土は暗褐色土である。土師器片が少量出土した。鎌倉時代後半のS D 5825は、発掘区の間ほぼ中央部を東西に横断する溝である。幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色土で、出土遺物は少なく、土師器杯・高杯・鍋、須恵器片などが出土した。

(VI) 遺物

出土遺物の最も多いS E 5850について概述する。

その主な器種は土師器が97.1%と出土遺物の大半を占め、器形及び器種については別表(第6表)のとおりである。

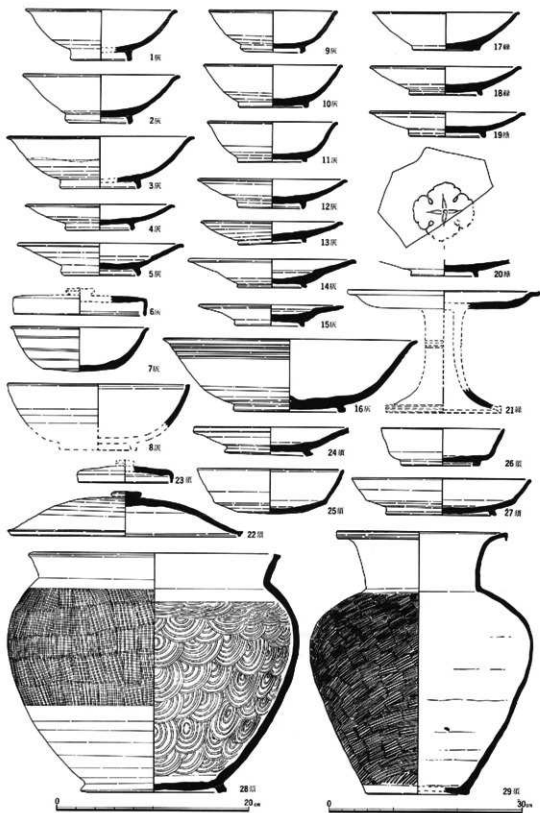
中層の上部から出土したのものには、土師器杯(30・31・42)・皿(52)・甕(62・65・68)、須恵器蓋(23)・杯(25～27)、灰釉陶器椀(1～3)・皿(4～5)などがある。また、中層下部からは土師器杯(32～45)・皿(46～52)・高杯(59・60)・鍋(63・64)・甕(66・69)、須恵器杯蓋(22)・甕(28・29)などが出土した。土師器杯には、口縁内部に放射状暗文、底部に螺旋状暗文を施したものの(36～38・43・45)がある。更に下層から出土したのものには、土師器皿(48・49)・甕(67)がある。総じて中層からの遺物が最も多く、数次にわたる堆積状況を示している。それらは概ね平安時代前II期のものを主体とするが、灰釉陶器などからみて、一部前I期の遺物が含まれる。

S E 5850の埋没年代は平安時代前II期であるが、それが井戸として使用されなくなり埋没を開始するのは前I期から前II期にかけての時期であろう。下層から出土した遺物は少ないが、これが井戸として使用されていた時期は前I期、もしくは可能性として平安時代初期まで遡り得るかも知れない。

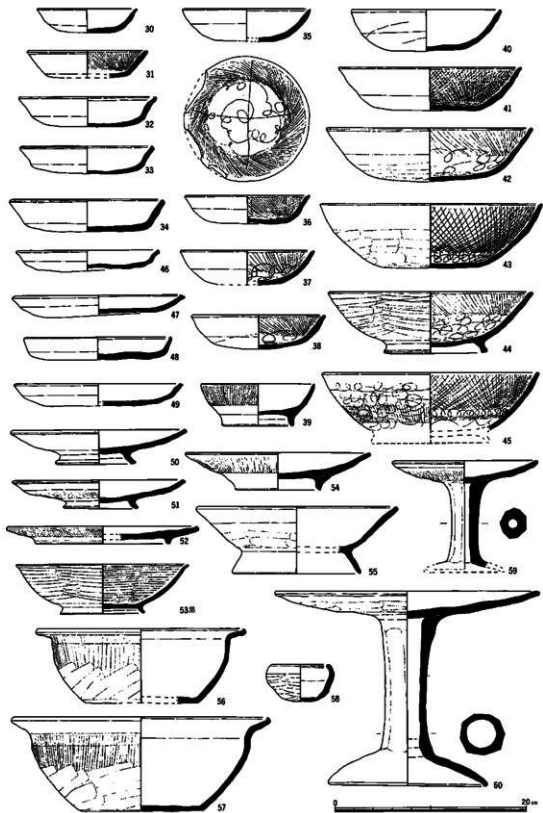
この井戸からの特殊遺物としては、緑釉陶器12点、墨書土器12点、瓦片5点、釘3点、土錘

器種	器形	破片数	比率	器種	器形	破片数	比率
土師器	杯・椀・皿	3,909		須恵器	甕	10	
	高杯	12			その他	10	
	甕	50		小計	42	1.0	
	その他	20		灰釉陶器	杯椀皿	57	
	小計	3,991	97.1		壺瓶	5	
			その他		1		
黒色土器	杯・椀・皿	2		小計	63	1.5	
	壺・瓶	1		緑釉陶器	杯椀皿	12	
	小計	3	0.1		高杯	1	
			小計		13	0.3	
須恵器	杯・椀・皿	17		総計		4,112	100
	鉢	4					
	高杯	1					

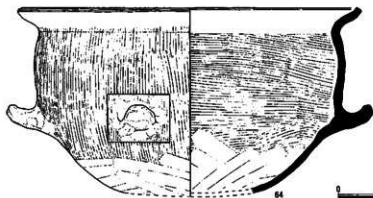
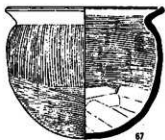
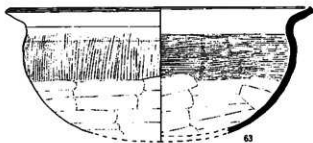
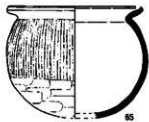
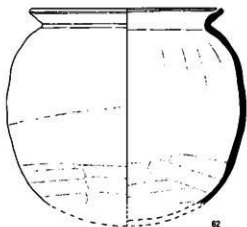
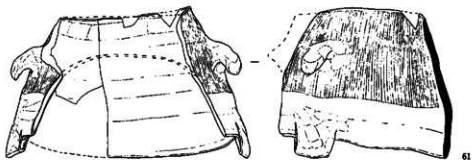
第6表 S E 5850出土土器器種構成



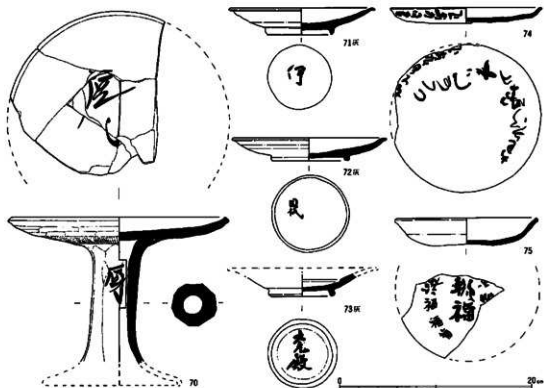
第7図 第83次出土遺物 S E 5850 ; 1~29 (29は 1 : 6)



第8圖 第83次出土遺物 S E 5850 ; 30~60



第9图 第83次出土遗物 S E 5850 ; 61~69



第10図 第83次出土遺物 S E 5850; 70~75

2点のほか、製塩土器が整理箱約1箱分ある。

緑釉陶器のうち高杯(21)は、口縁部と脚据部の破片である。これと同一個体片が、後述する第84次調査で検出の井戸 S E 5880 と S D 5856 から出土している。ちなみに緑釉陶器の高杯は、齋宮跡においては初例である。陰刻花文皿(20)は底部約3分の2を残す。これら緑釉陶器の産地の大半は猿投窯であるが、椀(17)はいわゆる蛇の目高台を持つ京都産のものである。黒色土器(53)は、井戸の中層下部から出土した黒色土器A類の椀である。小型壺(58)は、口径6cm・器高4cmの土師器の壺である。墨書土器(70)は土師器高杯で、脚部外面と皿の内面底部の2ヶ所に「厨」と書かれ、また(71~73)は灰釉陶器皿で、外面底部に書かれた文字はそれぞれ「伊」、「目代」、「少允殿」と判読する事ができる。(72)は平安時代前I期、(71・73)は平安時代前II期のものである。同じく(74・75)は井戸の中層上部・下部から出土した土師器皿である。(75)は外面底部中央に「福」とあり、その周囲を取り囲むような形で福の字が数個書かれている。(74)については判読出来ないが、いずれも吉祥文字の類と思われる。この他、灰釉陶器椀の底部外面に「司」と残るものがある(PL19 右上参照)。下の文字が「司」と読めるので齋宮寮13司のひとつに関係があると思われるが、上の文字が不鮮明で判読出来ず、今のところ「神」や「所」などの文字が候補にあがっているが、口惜しい。

Ⅳ 第 84 次 調 査 (西加座地区)

本年度第 3 回目の計画調査として実施した第 84 次調査は、第 83 次調査で検出した塚とそれに並走する溝の延長を確認することを目的として実施した。第 83 次調査区の東を第 84-1 次調査、北を第 84-2 次調査とした。調査面積は前者が約 660㎡、後者が約 140㎡である。調査期間は平成元年 12 月 20 日から平成 2 年 3 月 14 日までである。

(A) 第 84-1 次調査 (6 A F J-G)

(Ⅰ) 奈良時代後期の遺構

S K 5872・5879・5881がある。S K 5872は調査区の北端にある。あまりしまりのない黒色土の埋土から土師器装束が 2 点だけ出土している。後述するように第 84-2 次調査の S K 5923・5933 も同様に、出土遺物のほとんどない土壇であった。

. S K 5879・5881は調査区中央にある深さ 0.1m の浅い土壇である。

(Ⅱ) 平安時代初期の遺構

堀 1、溝 2がある。

S A 5840は、第 83 次調査から続くもので、今回の調査により東西 14 間(41.44 m)、南北 12 間(35.52 m)で一郭をなす事が確認された。また、この塚の外側 1 m の所を並走する溝 S D 5832

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈良時代後			5872・5879・5881		
平安時代	初期	5840(SA)		5832・5870	
	前Ⅰ期		5894		
	前Ⅱ期	5900・5901・5902	5890・5893・5899		
	後Ⅰ期	5876・5877			5880
	後Ⅱ期		5887・5897・5898		
鎌倉時代後半		5873	5874・5875・5882 5883～5886・5889 5891・5892・5895 5896・5904		
時期不明		5878・5888	5871		

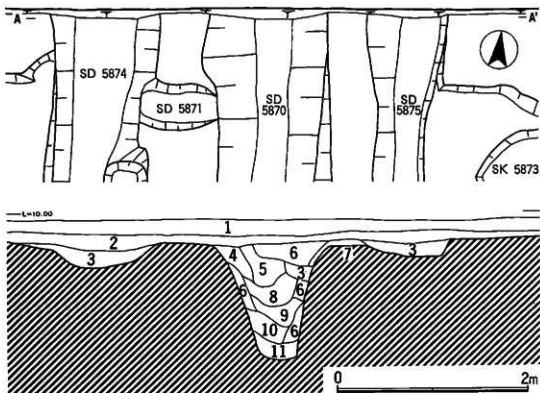
第 7 表 第 84-1 次 時期別遺構分類表

は、南東角が途切れてつながっていないことが確認された。さらに、今回の調査区で検出されているのは一郭の東辺にあたる沢だが、南東角から約20m北へ続いて途切れてしまう事が確認された。一郭への入り口とも考えられるが、門のような遺構は検出されていない。

SD 5870は、SD 5832と溝の心々で約10m離れて並行する溝である。北端では深さ1.2mであるが、南へ約14mの地点で急に浅くなってしまふ。このSD 5870はF 5ブロックのほぼ中央に位置する。仮にF 5ブロックの中央を区割する南北道路を想定すれば西側溝にあたる。東側溝については現在のところ明確には確認されていない。今後、周辺の調査が進めば明らかになるであろうが、斎宮家の造営形態を考えるうえで、他のブロックについても今後注目すべき視点である。同様の溝はD 4ブロックで第66次調査の際にも検出されている。SD 5870からは、土師器杯・蓋・皿・高杯・甕・鍋・甑・鉢、須恵器杯・蓋・高杯・壺・甕が整理箱で10箱分出土している。

(Ⅲ) 平安時代前期の遺構

前I期の遺構にはSK 5894が調査区西側にある。深さ0.1mと浅い。土師器杯・皿・甕、灰



1. 耕土 2. 中床 3. 灰褐色土 4. 暗茶褐色土(炭化物含) 5. 暗灰褐色土(炭化物含)
 6. 灰茶褐色土 7. 暗黄褐色土 8. 暗褐色土+黒色土1~2cm大ブロック混入 9. 橙褐色土+黒灰色土混入 10. 暗褐色土 11. 橙褐色土+黒色土が一部混入

第11図 溝SD 5870土層断面図(1:40)

釉陶器椀・段皿、須恵器蓋などが整理箱で2箱分出土している。

前Ⅱ期の遺構には掘立柱建物3、土壇3がある。いずれもS K 2650(第2表)の時期に当たる。

掘立柱建物S B 5900は、5間×2間の東西棟の建物である。東側に1間分の廂が付く、柱掘形は径0.4mの丸形である。S B 5901は、調査区南外側へ続く南北棟建物である。柱掘形は0.6mの隅丸方形である。S B 5902は、調査区の南西隅にある東西棟の建物であるが、第83次調査区へは続かないため、建物の規模は5間×2間と考えられる。柱掘形は0.6mの隅丸方形である。これら3棟の建物の柱掘形からは土師器が出土している。

土壇S K 5890・5893は重複しているがS K 5890の方が古い。S K 5893は東西2.4m、南北1.8mの楕円形の土壇である。S K 5890も一部を欠くが同規模の土壇である。いずれも土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀が出土している。S K 5899は東西1.7m、南北1.2mの楕円形で深さは0.1mである。土師器杯・皿・椀、黒色土器椀、灰釉陶器椀が出土している。

(Ⅳ) 平安時代後期の遺構

後Ⅰ期の遺構には掘立柱建物2がある。掘立柱建物S B 5876・5877は調査区の北に位置する。S B 5876は3間×2間の東西棟、S B 5877は5間×2間の東西棟で東側に廂が付く。いずれも柱掘形は0.3mの丸形である。

井戸S E 5880は、調査区のはほぼ中央に位置する。遺構検出の段階では、楕円形をしていたが掘り進めると方形の掘形となった。遺構検出面から4.7m掘り下げ完掘した。3.5mまでは、後Ⅰ期の遺物が埋土に含まれ、3.5mより下は平安時代前Ⅱ期のうちのS K 2650の時期の遺物が出土している。このことより前Ⅱ期にある程度埋没し、後Ⅰ期に完全に埋没したと考えた。また、調査の過程でこの井戸は方形の木枠を持ち、水溜として曲物を使用していたらしい痕跡を確認した。4.2mまで掘り下げたところ井戸側掘形埋土(黄褐色砂礫土)と井戸側内埋土(暗黄灰色砂質土と暗青灰色粘土の混入土)という違いを確認した。この面で須恵器杯(26)と横箆(28)が出土している。さらに井戸側内埋土を0.1~0.2m掘り下げたところ曲物を据える際の掘形埋土(灰黄色砂礫土)と曲物内埋土(暗黄灰色砂質土と暗青灰色粘土の混入土)を確認した。なお、この面で曲物に沿って一段ではあるが、0.2~0.3mの川原石が円形に並ぶ事を確認した。井戸割は、木組みであったと考えられる。縦板か横板かといった構造は不明であるが、東西・南北とも一辺約1.3m、曲物は径約0.6mと想定される。この井戸埋土からは、土師器杯・甕、ロクロ土師器杯・皿・台付皿・椀、須恵器杯・蓋・甕・壺、灰釉陶器椀・壺などが整理箱で7箱分出土している。

後Ⅱ期の遺構には、S K 5887・5897・5898がある。S K 5897・5898は重複関係にあるが、S K 5897が古い。S K 5897は東西1.2m、南北1.0mの楕円形、S K 5898は径1.8mの円形である。深さはどちらも0.4mである。S K 5887は調査区東側にある不整形な土壇である。深さは

0.6mと深い。

(V) 鎌倉時代後半の遺構

この時代の遺構には土壇1、溝13がある。

S K 5873は調査区北東隅にある東西1.3m、南北1.0mの楕円形の土壇で、土師器杯・鍋が出土している。

溝には東西溝S D 5883～5886・5896、南北溝S D 5874・5875・5882・5889・5891・5892・5895・5904がある。このうち、S D 5874・5875は北で西へ5° 振れる並行する溝である。いずれも幅0.8m、深さ0.2mである。両者は溝の心々で約3.6m離れ、この間が道路と考えられる。

(VI) その他の遺構

時期不明の遺構としてS K 5878・5888、S D 5871がある。

(B) 第84-2次調査(6 A F H-G・H)

(I) 奈良時代後期の遺構

調査区の北端と南端にS K 5923・5933がある。いずれも黒色土のしまりのない埋土である。深さはどちらも0.6mと深く、遺物はほとんど出土していない。

(II) 平安時代初期の遺構

堀S A 5840は5間分が確認されている。S D 5832は幅0.4m、深さ0.6mと深い。

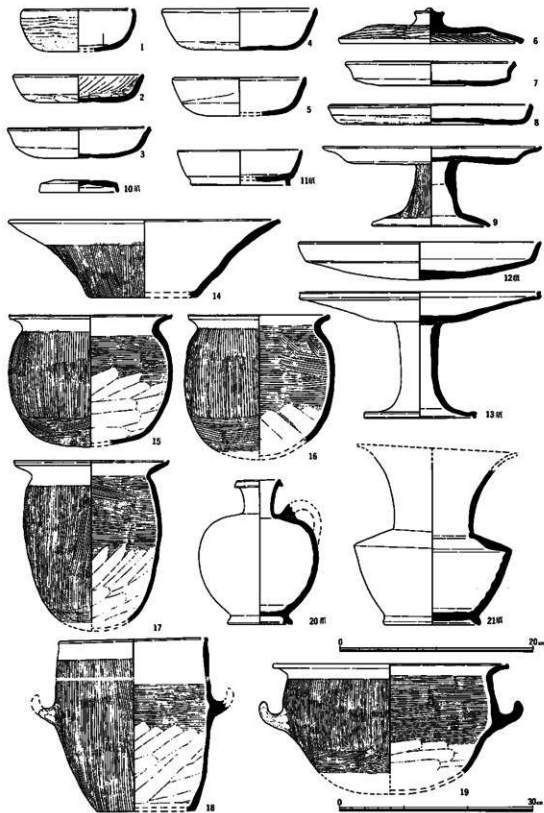
(III) 平安時代前期の遺構

前I期の遺構には掘立柱建物4、土壇3がある。

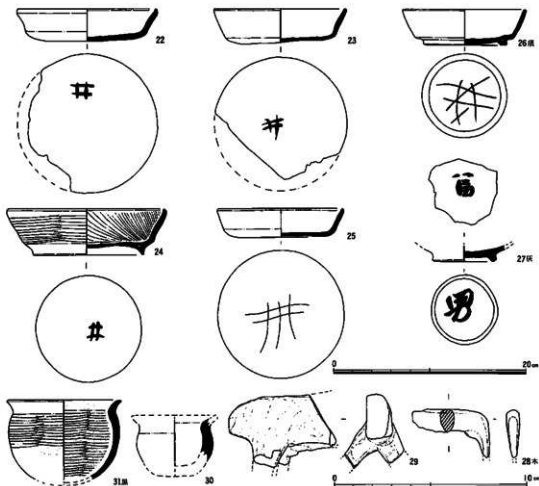
掘立柱建物は全て東西棟の建物であるが、調査区の外へ続くため規模のわかる建物は第21-4次調査に続くS B 5920の5間×2間だけである。おそらく他の3棟も5間×2間と思われる。S B 5920は一辺約1.3mの方形の柱掘形を持つ建物で、柱間は桁行・梁行とも2.4mである。

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈良時代後			5923・5933		
	初期	5840(SA)		5832	
平安時代	前I期	5920・5924・5925 5926	5921・5928・5929		
	前II期		5922・5927・5934		
	後I期	5930・5931	5932・5935		

第8表 第84-2次 時期別遺構分類表



第12図 第84次出土遺物 SD5870; 1~19 (18・19は1:6)



第13図 第84次出土遺物 S D 5870; 20~25、S E 5880; 26~28
S K 5893; 29、S D 5832; 30、S K 5928; 31 (28~31は 1 : 2)

柱掘形には土師器杯・皿などの遺物を多く含んでいる。棟方向は東へ北へ 1° 振っている。S B 5920と同じ棟方向・柱間の建物にS B 5924がある。ただし、柱掘形は一辺約0.9mの方形とやや小さくなる。柱掘形の切り合い関係からS B 5920が古い。S B 5925・5926は棟方向が東で 3° 南へ振る建物である。S B 5925の柱掘形は一辺約0.7mの方形である。柱掘形は径0.5mの丸形である。柱掘形の切り合い関係からS B 5925が古い。また、S B 5920とS B 5925も柱掘形が切り合い関係にあるが、S B 5920が古くS B 5925が新しい。

土壇には、S K 5921・5928・5929がある。S K 5921は調査区の北西隅にあり、S B 5920より古い。S K 5928・5929は重複関係にある土壇だが、S K 5929の方が古い。どちらからも土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・壺・壺・高杯、黒色土器碗が出土している。S K 5928の遺物の中には黒色土器ミニチュア甕(31)、S K 5929からは灰釉陶器耳皿が出土している。

前II期の遺構にはS K 5922・5927・5934がある。S K 5927はS K 3127（第2表）の時期の土壇で調査区の南東隅にあり、さらに調査区西外側に続く。S K 5922・5934はいずれも前II期のうちS K 2650（第2表）の時期にあたる。S K 5922は東西2.0m、南北1.0mの細長い土壇で調査区の北西に位置する。S K 5934は調査区南東に位置し東外側へ続く。

(IV) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物2、土壇2がある。すべて後I期の遺構である。

S B 5930・5931はいずれも調査区南西隅にある東西棟の建物である。2間×2間以上の建物でS B 5930は桁行・梁行共に2.1m、S B 5931は桁行・梁行共に2.0mである。

S K 5932は調査区南西に位置し南外側へ続く。現状で東西4.6m、南北2.6mと大きい土壇である。深さは0.1mと浅い。S K 5935は調査区南東端に位置し、南外側へ続く。

(C) 遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で約120箱ある。遺物がまとめて出土したのは平安時代初期の溝S D 5870、平安時代前I期の土壇S K 5828・5829、平安時代前II期の土壇S K 5890などである。

S D 5870からは土師器杯・蓋・皿・高杯・甕・鍋・甌・鉢、須恵器杯・蓋・高杯・壺・甕などが整理箱で10箱分出土している。土師器杯（22～24）は底部外面に「井」の墨書がある。

平安時代後I期に完没した井戸S E 5880からは、土師器杯・甕、ロクロ土師器杯・皿・台付皿・椀、須恵器杯・蓋・甕・壺、灰釉陶器椀・壺が整理箱で7箱分出土している。井戸底近くで出土した須恵器杯（26）には底部外面にへう記号が見られる。灰釉陶器椀（27）は折戸53号窯式のもので底部外面に「男」、内面みこみ部分に「富」の墨書が見られる。また、木枠の一部であったと思われる加工痕の見られる断片の他、木製の横櫓の断片（28）が出土している。原型は長方形の横櫓で肩部に丸みを持つものであったと思われる。ツゲないしはイスノキの板片の側縁から細い歯を挽き出し、表面を平滑に研ぎ上げた横櫓が一般的であるが、樹種、歯数は不明である。

特殊な遺物には円面硯、ミニチュアの黒色土器甕（31）・土師器甕（30）、緑釉陶器100点（うち緑釉緑彩が1点、陰刻のあるもの2点）、鉄製品7点、墨書土器15点がある。また、今回の調査では13点の瓦が出土している。図示しえなかったが、丸瓦、平瓦の破片で外面に縄目タタキ、内面に布目を残す物があり、時期的には奈良時代後期の瓦である。

(D) まとめ (第83・84次調査)

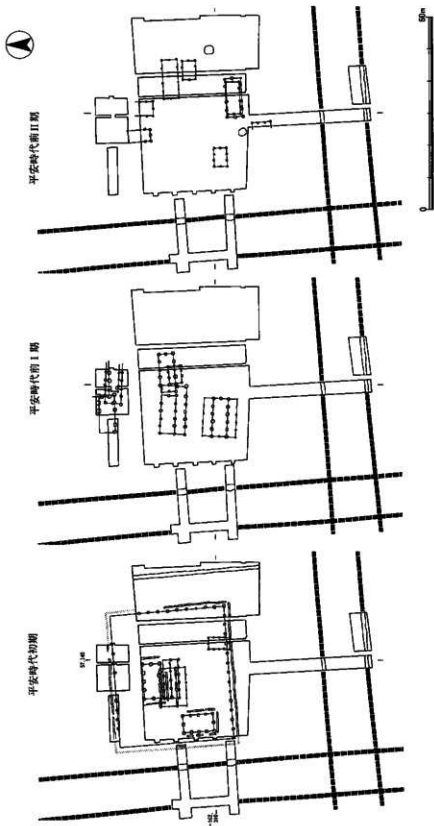
史跡東部地域F5ブロック(第2図)内の南西部で実施した2次にわたる調査によって、われわれは従来にない大きな資料を得ることが出来た。

まず遺構の面で最も注目すべき成果としては、平安時代初期に比定し得る2棟の掘立柱建物(SB5780・5820)とその2棟を取り囲む形で方形に巡らされた東西14間分(41.44m)、南北12間分(35.52m)の掘立柱塼(SA5840)及び更にその外周を巡る溝(SD5832)の存在が明らかになったことである(付図3参照)。区画溝・道路によって形成された約1町5段のブロック内部に、当該時期の建物群が整然と並び並ぶ様子は、過去の調査でも何度か窺うことは出来た(註1)が、今回のように周囲を塼によって取り囲まれた施設のほぼ全容が明らかになったのは初めてのことであった。調査率30%を超える中町裏地域全体の中に置いてこれを眺めてみても、上記の施設は現段階ではやはり特異と言わざるを得ない。それは外部からの出入を極力拒んでいるかのような空間に見える。しかしながら、これを直ちにその当時の齋宮寮内における特別な、あるいは中心的な建物と考えるのは今は早計に過ぎよう。F5ブロック南西部の一部を占めるこの施設は、この時期の齋宮寮を構成した建物群の中の、少なくともある性格を持った施設の一部分にしか過ぎず、これだけを以て何かを言えるような段階には残念ながらまだない。ただ、塼に囲まれたこの一郭の中央から南東部が小広場としての空間地であること、塼の内部に井戸が無いことなどを考慮すれば、あるいはなんらかの役所に付属の儀式の場として機能した可能性も、これを否定出来ないかも知れない。

同じく平安時代初期と言っても時期差はあって、SB5800・5810は上に見たSB5780の建て替えと考えられ、すでに変化が生じている。その時SB5820やSA5840・SD5832が引続き並存していたかどうか、それは不明である。SB5835は齋宮跡のこの時期の建物としては異質だが、この時には既にSA5840・SD5832は姿を消していたと言わなければならない。

発掘区東端の南北溝SD5870はFブロックのほぼ中央を走るものである。他のブロックの東西幅が120m間隔であるのに対して、当該Fブロックの東西幅だけが約10m長いということはわれわれの間で以前から問題になってきたところであった。もしこの南北溝が道路の西側側溝だとすれば、あるいはFブロックの中央部には南北の道路が走る可能性も出てきたのである。これもまた今後、平安時代初期における齋宮寮の遺構形態を考える上で貴重な成果であったといえよう。

平安時代前I期になると、ここにはSB5815・5830・5925などの大型の建物が出現する(第14図)。そして井戸SE5850から出土したこの時期の注目すべき遺物に墨書土器「目代」(72)がある。石川県立埋蔵文化財センターの垣内光次郎氏のご教示によれば、金沢市の近岡遺跡出土



第14図 第83・84次調査 堀立柱建物の配置変遷 (1:1200)

の木簡にも「目代」と判読し得る文字があり、共存遺物から10世紀初頭前後の年代が与えられている(註2)。いま他の類例を知らないが、今回出土の上記墨書土器は9世紀前半代のものであり、考古遺物の中で「目代」の文字資料としては恐らくかなり古い方に属するものであろう。これが当時の齋宮寮におけるいかなる官人の目代であったかといえば、可能性として一番確率が高く、かつ妥当なのはやはり寮頭(長官)のそれである。既に明らかにしたように(註3)、その時代には伊勢守あるいは伊勢権介と齋宮寮頭もしくは権頭との兼務のほか、皇親諸王の中から寮頭に任命されている例などいくつかある。即ちこれらの中には、伊勢国衙の方が本務で齋宮寮の方を兼務する場合は当然のことながら、本人が在京のままという場合もあり得たであろうから、そのような場合には代官としての目代が派遣されていて、寮内に常駐していたとしても何ら不思議はない。あくまで推測の域を出ないが、この墨書土器が出土したS E 5850からそれほど遠くない範囲内にある平安時代前期の建物については、恐らくそのような「目代」が日常出入りするに相応な性格の役所(あるいはその一部)である蓋然性が他所に比して高いと言わなければならない。そして、同じ井戸から「厨」と読める墨書土器(70)が伴出している事実は、この文字が奈良・平安時代では役所的なものを指して使われている(註4)のであってみれば、さらにこの推測を補強することにもなるであろう。従って上記S B 5815・5830など飛を持つ大型の建物は、今後この周辺で検出されるであろう同時期の建物と併せて注目すべきものである。

次の前II期になると、井戸S E 5850は埋没し、代わってS E 5880が使われた。大型の建物にはS B 5807・5845・5846などがある。墨書土器「少允殿」、「□司」はそれらの建物の性格をある程度規定するに足る重要な遺物であった。前者は齋宮寮頭をはじめとする四等官の中の従七位相当官を意味し、後者は恐らく齋宮寮の中のある一つの役所を指している。少なくとも平安時代のこの時期に、F5ブロック内には齋王の居所はありえなかったことをそれは裏付けているように思う。先の「目代」といい、この「少允殿」といい、いずれも齋宮寮のいわば主管課とでも言うべき建物がこの近辺にあったことをかなり強く印象づけるものだが、「□司」を完全には判読することが出来ないために、前II期に関してはなお不十分のまままで今後の調査結果に委ねたい。

註1. 第51・61次調査 『三重県齋宮跡調査事務所年報1985』、第73次調査 『同年報1987』、第77次調査 『同年報1988』

註2. 『近岡遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986

註3. 『齋王宮跡資料』 三重県教育委員会 1978

註4. 福山敏男『齋王宮と齋宮院の建築』(『伊勢齋王宮の歴史と保存II』三重の文化財と自然を守る会編、1982 所収)

掘立柱建物・塀一覧表

S B	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
第82-1次調査(6ADI-F~J)								
5622	3×3	N16°W	4.2	4.2	1.4	1.4	奈良後	総柱
5643	3×2	E16°N	3.9	3.8	1.3	1.9	〃	
5644	3×2	N16°W	3.9	3.4	1.3	1.7	〃	
5648	(3)×2	E16°N	—	4.2	2.2	2.1	〃	
5669	3×2	N16°W	7.2	3.8	2.4	1.9	〃	
5722	3×2	N16°W	7.2	4.2	2.4	2.1	〃	
5681	(4)×2	N0°	—	4.4	2.0	2.2	平安前	
5720	3×2	N7°E	5.4	5.8	1.8	1.9	〃	
5723	(3)×2	N10°E	—	4.2	2.0	2.1	〃	
5721	3×2	E5°S	6.3	4.4	2.1	2.2	平安後	
5719	5×(3)	E2°S	8.4	—	1.6	2.0	鎌倉前	
第82-2次調査(6ADI-K~L)								
5734	(4)×2	N4°E	—	4.0	2.1	2.0	奈良後	
5738	3×2	E0°	6.0	2.0	2.0	2.3	〃	
5737	(4)×2	N2°W	—	3.8	1.4	1.9	平安前	
第83次調査(6AFJ-C~F)								
5780	4×2	E4°N	10.8	5.2	2.7	2.6	平安初期	雨落ち溝あり 溝心まで1.8m
5800	5×2	E3°N	12.0	5.0	2.4	2.5	〃	
5810	5×2	E4°N	12.0	4.6	2.4	2.3	〃	南面廂、廂柱間3.0m、溝もち
5820	4×2	N4°W	9.6	5.4	2.4	2.7	〃	
5835	4×2	N0°	6.8	3.4	1.7	1.7	〃	雨落ち溝あり、溝心まで1.2m
5840	(3)	E4°N N4°W	41.44 35.52	—	2.96	—	〃	
5806	(4)	E4°N	10.8	—	2.7	—	〃	S D 5832より新しい 塀南北14間(84次で確認)
5812	5×2	E4°N	12.0	4.8	2.4	2.1	平安前期	S B 5808より古い 東面廂 廂柱間 2.8m 東面廂 廂柱間 3.0m 北面廂 廂柱間 2.9m 南面廂 廂柱間 2.6m
5815	5×2	E3°S	12.2	4.6	2.44	2.3	〃	
5830	5×2	E3°S	12.0	4.6	2.4	2.3	〃	
5808	3×2	E6°N	5.4	4.0	1.8	2.0	〃	
5787	4×2	N6°E	6.8	3.8	1.7	1.9	平安前期	
5818	3×2	E2°N	5.7	4.2	1.9	2.1	〃	84次で確定
5829	3×2	E1°N	5.8	4.0	1.93	2.0	〃	84次で確定
5845	5×2	E5°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
5846	5×2	E3°N	10.0	4.2	2.0	2.1	〃	S B 5845より新しい
5853	3×—	N4°W	5.7	—	1.9	—	〃	
5789	(2)×2	N2°W	—	4.4	2.0	2.2	〃	S K 5801より古い
5807	5×2	E3°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
5788	(3)×2	N2°E	—	4.2	1.8	2.1	平安中期	桁行は83次・84次の壁の下の ため確認不可能
5797	(4)×2	E4°S	—	3.4	2.0	1.7	〃	
5799	(3)×(2)	E2°S	—	—	1.8	1.9	〃	
5802	(3)×2	E4°S	—	3.8	1.8	1.9	〃	
5827	(3)×2	E4°S	—	4.0	2.0	2.0	〃	
								S D 5832より新しい

S B	規 模	棟方向	桁 行 (m)	梁 行 (m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
5828	(4)×2	E 4°S	—	4.2	1.8	2.1	平安中期	S D 5832より新しい 84次で確定
5847	5×2	E 4°S	10.0	4.2	2.0	2.1	"	
5781	3×2	N 1°E	6.3	4.2	2.1	2.1	平安後期	S D 5803より新しい S B 5815より新しい S B 5815より新しい
5796	(2)×2	N 3°W	—	3.8	1.9	1.9	"	
5813	5×2	E 3°N	11.5	4.8	2.3	2.4	"	
5814	3×2	E 3°N	8.1	5.2	2.7	2.6	"	
5816	3×2	N 4°E	6.0	4.0	2.0	2.0	"	
5817	3×2	E 3°N	4.5	3.6	1.5	1.8	不明	S D 5837より古い
5842	3×(2)	E 2°N	4.8	—	1.6	1.8	"	

第84-1次調査(6 A F J - G)

5900	6×2	E 2°N	11.2	3.9	1.88	1.95	平安前期	東面廂、廂柱間1.8m
5901	(3)×2	N 6°W	—	3.8	1.9	1.9	"	
5902	(5)×(2)	E 6°S	—	3.6	1.8	1.8	"	
5876	3×2	E 2°S	5.3	3.8	1.77	1.9	平安後期	東面廂、廂柱間1.7m
5877	5×2	E 5°S	9.7	3.9	2.0	1.95	"	
5903	(3)×2	E 2°W	—	3.4	2.1	1.7	平安後期	

第84-2次調査(6 A F H - G・H)

5920	5×2	E 1°N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前期	S B 5924より古い
5924	(4)×(2)	E 1°N	—	—	2.4	2.4	"	
5925	(5)×2	E 3°S	—	5.0	2.4	2.5	"	S B 5926より古い
5926	(4)×2	E 3°S	—	4.0	1.9	2.0	"	
5930	(2)×2	E 0°	—	4.2	2.1	2.1	平安後期	
5931	(2)×2	E 0°	—	4.0	2.0	2.0	"	

竪穴住居一覽表

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(m)	柱穴	カマド	時期	備 考
第82-1次調査(6ADI-F~J)							
5631	-×-	N13°W	35		東 壁	奈良後	S B 5632より新しい
5632	4.7×-	N 4°W	35			"	
5668	-×-	N10°W	10			"	
5679	-×-	N 0°	25		北 壁	"	
5680	-×-	N 0°	25			"	
5686	3.1×3.0	N 9°W	30			"	
5687	-×-	-	10			"	
5692	-×-	-	34			"	S B 5693より古い
5693	-×-	-	32			"	S B 5694より古い
5694	-×-	-	10			"	
第82-2次調査(6ADI-K・L)							
5743	-×3.4	N 22°W	20			奈良後	

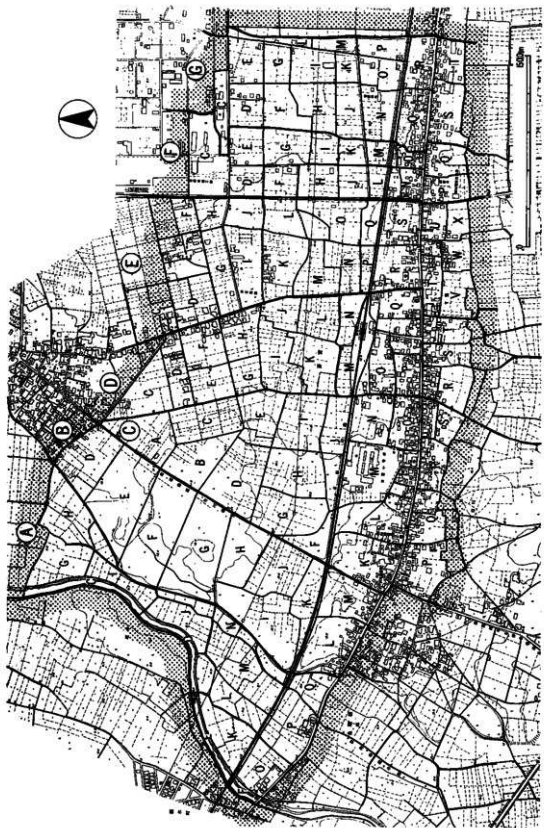
斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	S45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 裏328 (小川)
3		B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	C地区	13-9		# 2773 (細井)
5	48	D地区	13-10		東 裏362-1 (児島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		# 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		# B
8-6		Kトレンチ	16-3		# C
8-7		Lトレンチ	16-4		# D
8-8		Mトレンチ	16-5		# E
8-9		Nトレンチ	16-6		# F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社助火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		栄 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		# 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		# 3237-1 (里中)
9-6		Vトレンチ	17-8		栄 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L-E-I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N-M-N-O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O-1-J (梅草)
10		広城園道路	21-1		6 A G N-B (鍛冶山、中山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A F I-D (西加座2711-2, 2717-4他、山路)
11-2		# 2681-1 (山名)	21-3		6 A F D-D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H-F (西加座2678, 2679-3, 森下)
11-4		下 園2926-9 (吉本)	21-5		6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G-A (東殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D-R (蘇林3218-3、宇田)
13-1		西加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		# 2436-4 (中村)	22-2		6 A G U
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		栄 殿2916-2917 (松井)	23	54	6 A E L-B (下園)
13-5		御 館2974-1 (川本)	24		6 A C F-D (西加座)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区	
25-1	54	6ADP-K (牛薬3029-1、三重土地ホ-ム)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)	
25-2		6ACA-Y (古里3270、藤田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)	
25-3		6ADD-F (藤林3139-3、池田)	38		6ADC-S (塚山)	
25-4		6AER-H (牛薬3014、牛薬公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)	
25-5		6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)	
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他 (斎宮地内)	
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1		57	6AEI-D・F (桑殿)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2			6AEK-A・B (桑殿)
25-9		6ACN-C (広前3387-1、北出)	43-1			6ADC-C (出在家3235-2、永田)
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、水島)	43-2			6ADT-B (木薬山308-1、山本)
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3			6ACP-T (南裏241-1、辻)
25-12		6AEE-Y (桑殿2892-3、山本)	43-4			6ADS-D (牛薬123-3、西山)
25-13		6AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5			6ADE-D (藤林3220-3、澄野)
26-1		6AFR (中西)	43-6			6AGE (東前沖、町道側溝)
26-2	6AEX-6ACQ (鈴池、木薬山、南表)	43-7	6ABD-F (古里588-6、今西)			
26-3	6AEV-W・X (鈴池)	43-8	6ADQ-H (牛薬3025-2、大西)			
26-4	6ACR (木薬山、南表)	44	6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)			
27	6ACG-S・T (東裏)	45	6AEG-P・Q (桑殿2904-2、他)			
28	6AEO-D (柳原)	46	6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)			
29	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47	6ADJ-D・G他 (西加座、西館、高ノ前、上園)			
30	55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48-1	58	6ACM-M (広前3385、斎宮小)	
31-1		6ADO-M (内山3038-13、岩見)	48-2		6ADP-Q (牛薬3033-1・2、吉田)	
31-2		6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48-3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)	
31-3		6ABD-A (古里588-4、北畠)	48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)	
31-4		6ADQ-T (牛薬3018-2、百五銀行)	48-5		6AGD-6AFE (東前沖、町道側溝)	
31-5		6ACC-G (塚山3338-3、水谷)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)	
31-6		6ABO-X (古里576-1、池田)	48-7		6ADT-H (木薬山307、森西)	
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)	
31-8		6ACN-G (広前3388-1・5・8・9、森)	48-9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)	
31-9		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-10		6AGT (牛薬、町道側溝)	
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮歌)	48-11		6ADP-E (鍛冶山2351-1、2352-1、柳原)	
31-11		6ADT-I (木薬山304-2、澄野)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)	
31-12		6ADT-J (木薬山304-7、宇田)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)	
32		6ACE-D・E・F (塚山)	48-14		6AET (牛薬、町道側溝)	
33	6ADE-C・D他 (藤林)	49	6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)			
34	6AFK-F・G・H (西加座)	50	6ACH-H (東裏294、297、山本)			
35	6APE他 (西前沖)	51	6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、森下)			
36	56	6ABI-F (中垣内)	52	6AGF-D (西加座2703、他)		
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本語本)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)	
37-2		6ADQ-R (牛薬3021-2、野田)	53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)	
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、押田)	53-3		6ABE (古里573-2、永納)	
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本語本)	53-4		6ACL-S (東裏271-1、田所)	
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5		6ACR (木薬山97-5、田中)	
37-6		6ABD-A (古里588-2、北畠)	53-6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)	
37-7		6AEC-M (苅干2861-2、斎王公民館)	53-7		6ADD-U (藤林3147-3、野島)	
37-8		6ADR-P (木薬山128・8・13・14、富山)	53-8		6AGE-O (東前沖2470-2、上田)	
37-9		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9		6ACS-O (木薬山95-2、浅尾)	
37-10		6AED-O (桑殿3217-1、渡部)	53-10		6ACAR (古里3267-1、西川)	
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮歌)	53-11		6ADR-W (木薬山131-7、西村)	

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
53-12	59	6 A B L-K (中垣内464-2、沢)	70-10	62	6 A F D-B-D (西前沖2649-4、大西)
53-13		6 A D Q-L (牛糞3022、辻)	70-11		6 A G O-H (殿治山2363-2、川合)
53-14		6 A C M-O (東裏287-3、体育庫)	70-12		6 A D D-F-G (篠林3158、長谷川)
53-15		6 A F K-C-D (西加座2721-1、鈴木)	70-13		6 A E C-N-G (葺干、佐藤)
54		6 A F E-N (西前沖2630、他)	70-14		6 A B L-R (中垣内459、北岡)
55		6 A E N-P (柳原、御殿2785-1、他)	70-15		6 A F D-A (西前沖2644-1、山本)
56		6 A C H-S (東裏289-1、他)	70-16		6 A C B-A他 (町道塚山線拓幅)
57	6 A G F-H-I (東加座2441、他)	71	6 A B E (古里501、他)		
58-1	60	6 A F K-C-D (西加座2721-1、鈴木)	72-1	6 A B E (古里500、他)	
58-2		6 A F H-N (西加座2681-8、三村)	72-2	6 A B F (古里523、他)	
58-3		6 A C M-N (東裏3385-2、斎宮小)	72-3	6 A B F (古里551-2、他)	
58-4		6 A B L-A (中垣内4731-1、小家)	72-4	6 A B F (古里528-1、他)	
58-5		6 A D Q-Q (牛糞、町道御溝)	73	6 A F F-B-C-E-G (西加座2663-5、他)	
58-6		6 A D R-V (木葉山131-3、西山)	74-1	6 A B F (古里523、他)	
58-7		6 A G S-G (中西611、山路)	74-2	6 A B F (古里522、他)	
58-8		6 A B M-A (中垣内430-3他、近鉄)	74-3	6 A B E-F (古里524、他)	
59		6 A C J-I (広頭3379-1、他)	74-4	6 A B E (古里548-1、他)	
60		6 A G J-B-D-G (東加座2450-1、他)	74-5	6 A B E (古里543、他)	
61		6 A F F-H-I-D (西加座2663-1、他)	75	6 A G F-C (西加座2702、他)	
62		6 A G I-J-K (東加座2425、他)	76-1	63	6 A D B-A-D (町道塚山線拓幅)
63		6 A F G-M-N (西加座2659-1、他)	76-2		6 A D E-F-G (篠林3158、長谷川)
64-1	6 A C O-H (牛糞3395-1、トコイ)	76-3	6 A B E (古里554、明和町)		
64-2	6 A G L-F (東加座2435-1、大和谷)	76-4	6 A C K (東裏354-13、山際)		
64-3	6 A D D-A (篠林3136-1、山路)	76-5	6 A E E-W (築殿577、岡田)		
64-4	6 A G R-N (笹川2340、丸山)	76-6	6 A C B-A (塚山3276-1、今西)		
64-5	6 A C M-R-Q-P (東裏3385-2、斎宮小)	76-7	6 A C M-M (広頭3385-2、斎宮小)		
64-6	6 A C K (東裏361-2、竹川自治会)	76-8	6 A F M-G (殿治山2736-3、近鉄)		
64-7	6 A G I-G (東加座2435-2、大和谷)	76-9	6 A C Q (南裏144-1、祖所)		
64-8	6 A G R-J (笹川2341-6、山下)	76-10	6 A B D-U (古里579、池田建設)		
64-9	6 A D Q-M (牛糞、町道御溝)	76-11	6 A B E (古里554、明和町)		
64-10	6 A C F-A (東裏365-1、樋口)	76-12	6 A E E (築殿、町道下水管)		
64-11	6 A C M-O (東裏3385-2、斎宮小)	76-13	6 A D D-K (篠林3143、中西)		
64-12	6 A D E-B (篠林3162-3、江崎)	76-14	6 A E E-S (築殿2878-3、山路)		
65-1	6 A C C-M (塚山3331-1)	76-15	6 A B F-6 A B H (中垣内、築道拓幅)		
65-2	6 A E G-S (築殿2908-2、他)	76-16	6 A E K-B (下園2936-2、明和町)		
65-3	6 A E I-L-M (築殿2917-4、他)	76-17	6 A E V-A (鈴池339-5、水島)		
66	6 A G G-C (東加座2437-1、他)	77	6 A G J-D (東加座2453、他)		
67	6 A B F (古里523、他)	78	6 A D L (宮ノ前3054、他)		
68	6 A B F (古里502、他)	79	6 A G G-A-B (東加座2440、他)		
69	6 A G M-E-H (東加座2373、他)	80	6 A F G-F-I (西加座2696、他)		
70-1	62	6 A C C-X (塚山3325-1、江崎)	81-1	H1	6 A E C-F (町道塚山線拓幅)
70-2		6 A E E-W (築殿2875-2、岡田)	81-2		6 A B J、6 A B K (古里、築道拓幅)
70-3		6 A D R-I (木葉山129-5、大西)	81-3		6 A D S-M (木葉山137、中川)
70-4		6 A C N-A-B-E-L (広頭3389-8、林)	81-4		6 A E D-L (築殿2881-2、山本)
70-5		6 A E W-A (鈴池333-1、八田)	81-5		6 A F Q-C (中西597-2、木戸口)
70-6		6 A B L-S (中垣内430-6、奥山)	81-6		6 A D D-F (篠林313、池田)
70-7		6 A E E-T (築殿577、浅尾)	81-7		6 A B L-U (中垣内430-7、川本)
70-8		6 A E U-6 A E X-A (牛糞、鈴池、三系塚)	81-8		6 A B J (古里、明和町)
70-9		6 A E P-C-D (御館、柳原、近鉄)	81-9		6 A C F (中垣内、三重県)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
81-10	1	6 A D R - V (木業山297、明和町)	81-16	1	6 A G (北野3655-1、他)
81-11		6 A C M - N (広瀬3385-2、明和町)	82-1		6 A D I - F ~ J (上園3095、他)
81-12		6 A E D - A (篠林3225、中川)	82-2		6 A D I - K · L (上園3100、他)
81-13		6 A C B (塚山3276-19他、明和町)	83		6 A F J - C ~ F (西加座2770-3、他)
81-14		6 A E D - F (泉殿2844-2、澄野)	84-1		6 A F J - G (西加座2764-3)
81-15		6 A E D - U (泉殿2885-2、西山)	84-2		6 A F H - G · H (西加座2679-1、他)



第15图 南京地区表示

圖 版



第82-1次調査（北から）



第83次調査（南東から）



第82次 S K5600出土墨書土器「藏長」



第83次 S E5850出土墨書土器「目代」



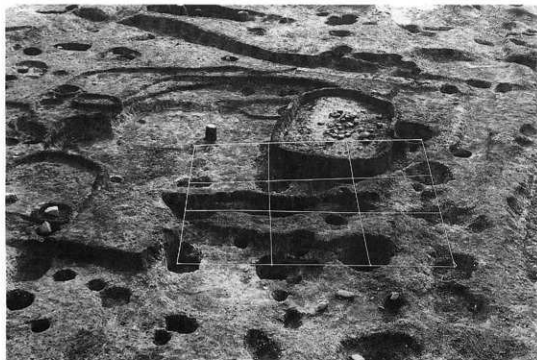
全景 (南から)



北半景 (西から)



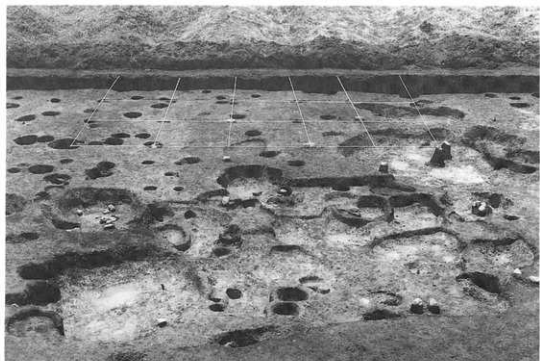
SD136・SD5602 (東から)



SB5622と土坑群 (東から)



SB5643・SB5644 (南から)



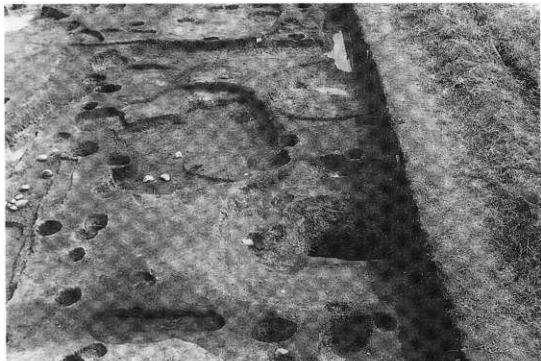
SB5719と土塚群 (北から)



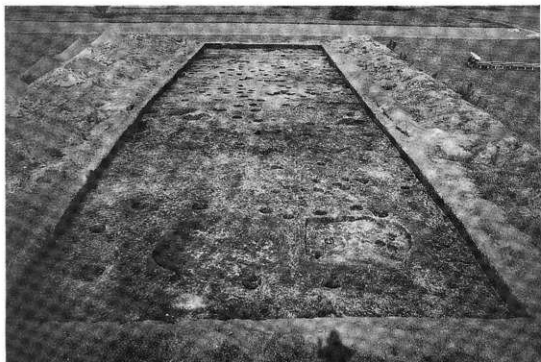
SE5672と土壇群 (西から)



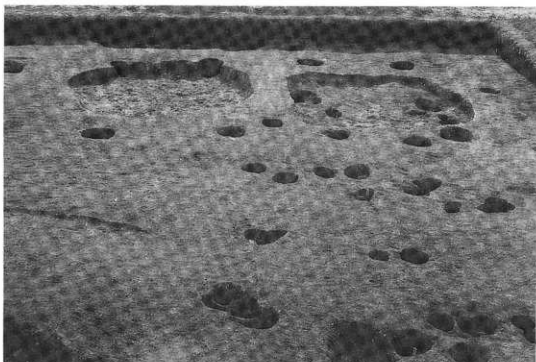
SE5658・SK5600・SK5661・SK5662・SK5663 (東から)



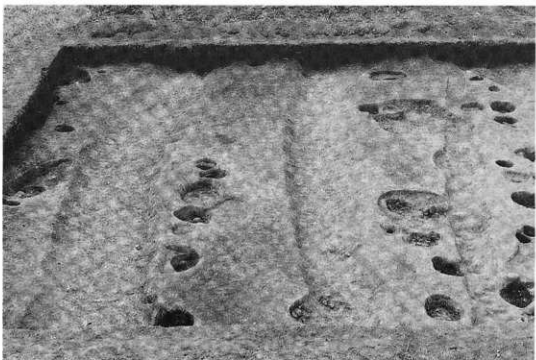
S B 5686・S E 5684 (北から)



全景 (西から)



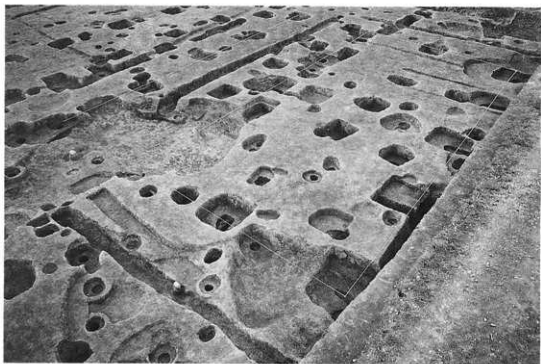
S K 5733・S K 5732 (東から)



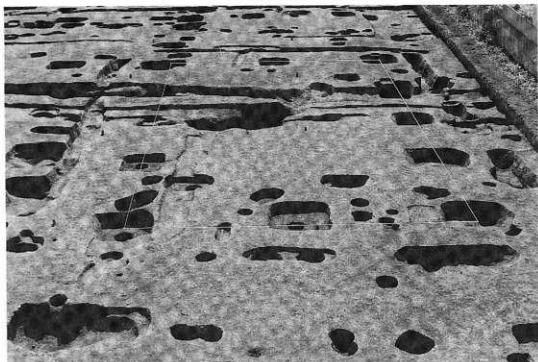
S D 5746・S D 5747 (北から)



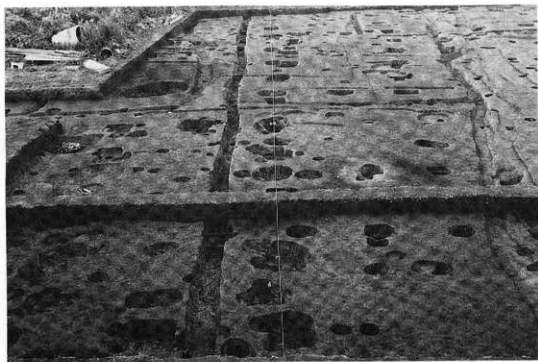
北半景（東から）



S A 5806・S B 5780（北東から）



S B 5820 ・ S D 5822 ～ S D 5824 (北から)



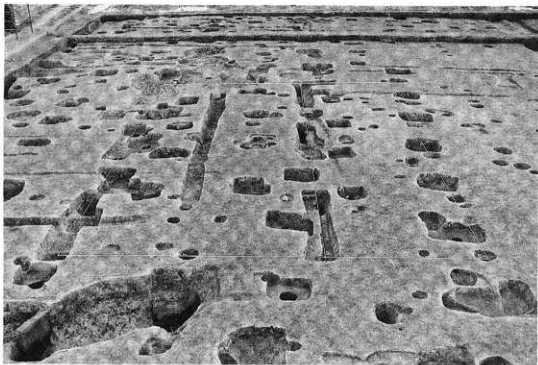
S A 5840 ・ S D 5832 (東から)



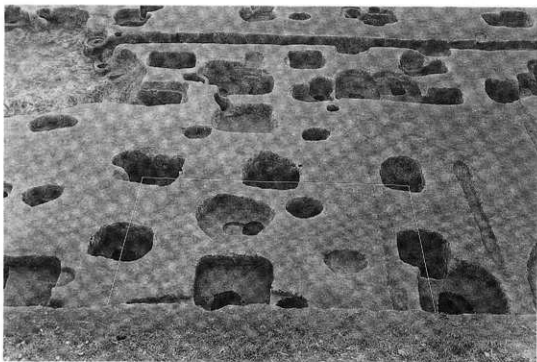
SB5815 (東から)



SB5830 (東から)



SB5800 (西から)



SB5787 (北から)



南部景 S D5843・S D5844・S B5853 (北から)



S E5850 (北西から)

PL14

第84-1次調査



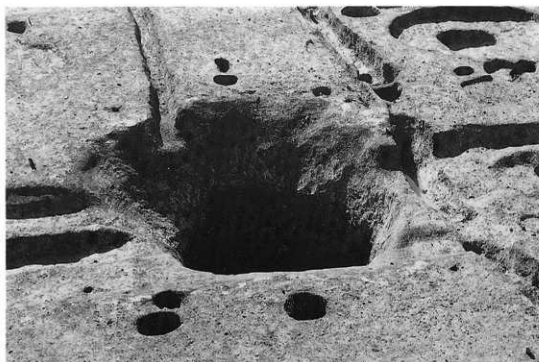
全景 (南から)



SA5840 (北西から)



S B 5900 (北西から)



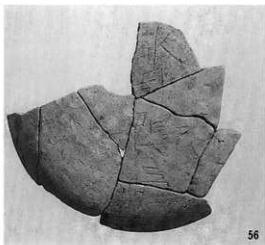
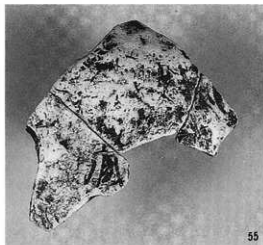
S E 5880 (北から)



SD5870・SD5874・SD5875 (南から)



全景 (北から)



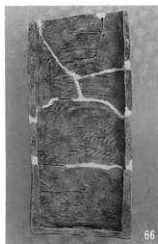
第82次調査 S K 5650・S K 5640・S B 5632・S K 560、
S K 5700・S K 5679出土土器



62



64



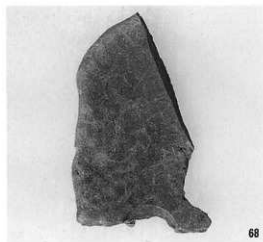
66



66



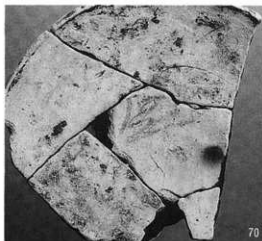
47



68



67



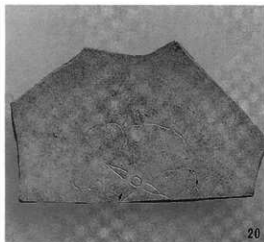
PL20



第83次調査



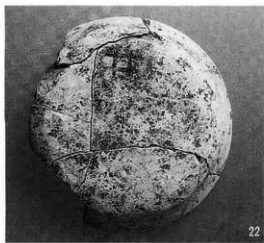
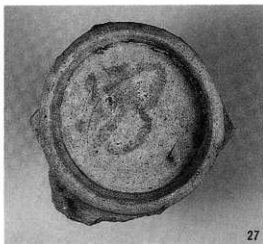
第83次調査 SE5850出土土器



第83次調査 S E 5850・S K 5790出土土器

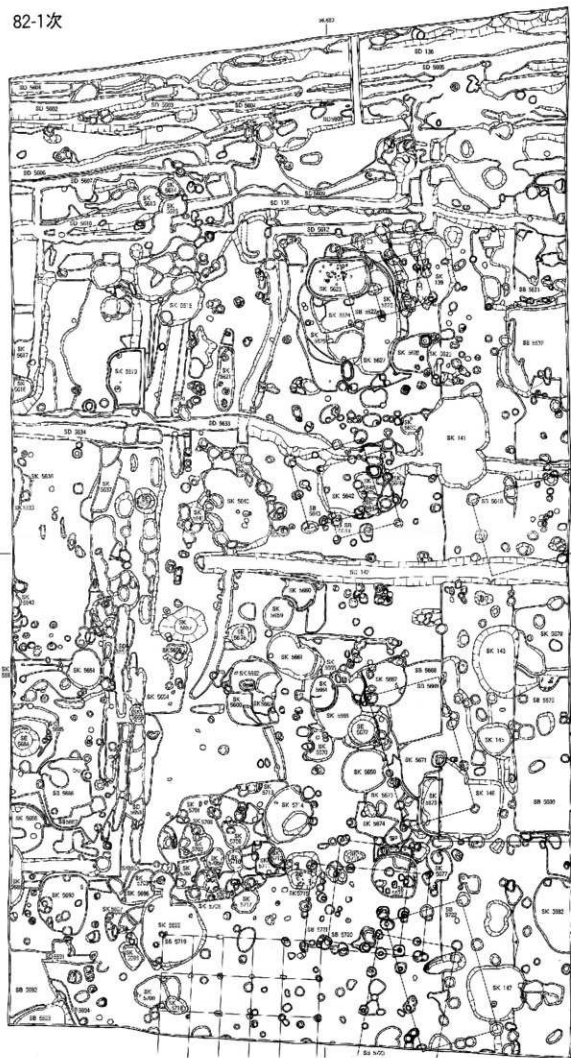


第84次調査 S D 5870・S E 5880出土土器

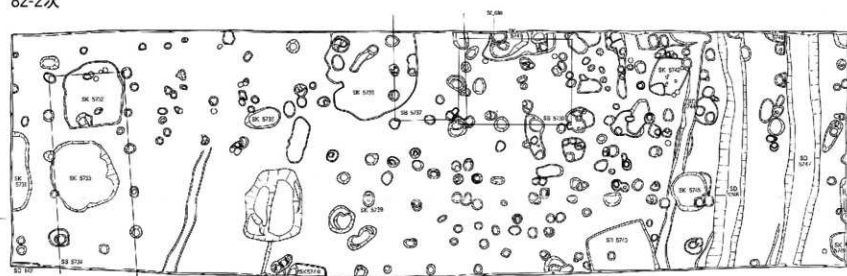


- 付図 1 第82次調査区遺構実測図(1 : 200)
- 付図 2 第82次調査区土層断面図(1 : 100)
- 付図 3 第83・84次調査区遺構実測図(1 : 200)
- 付図 4 第83・84次調査区土層断面図(1 : 100)

82-1次

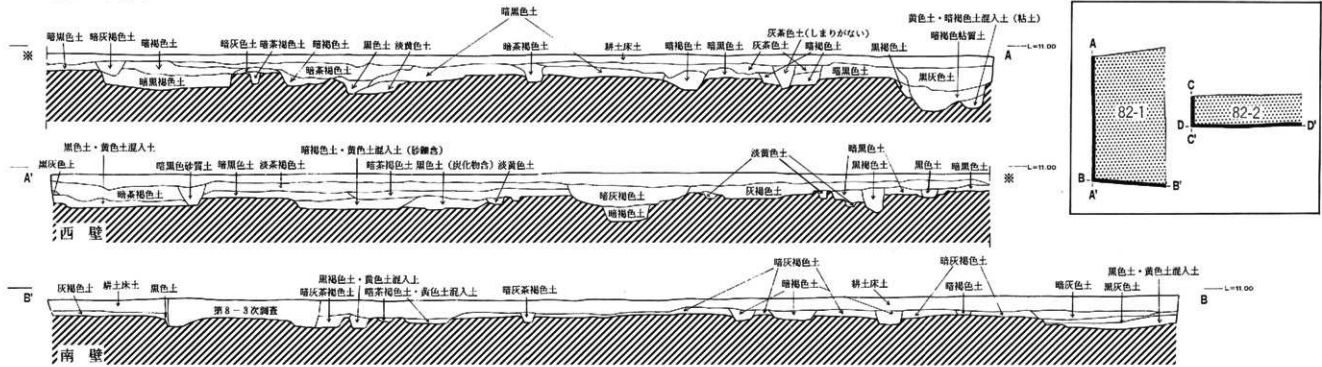


82-2次

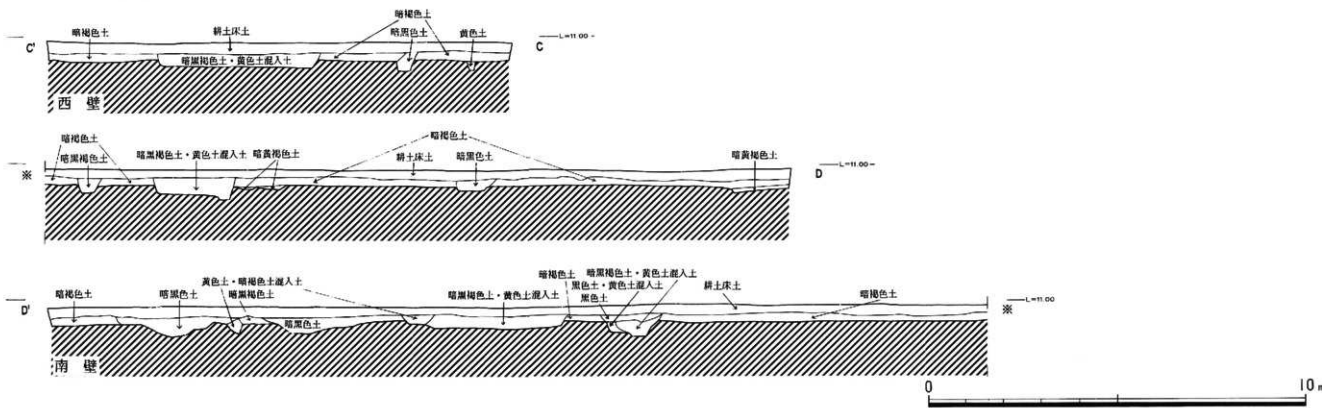


付図1 第82次調査区遺構実測図(1:200)

82-1次



82-2次

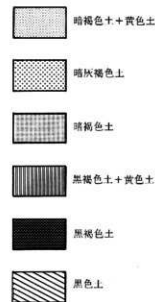
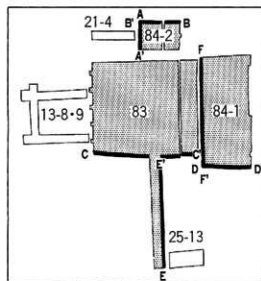


付図2 第82次調査区土層断面図(1:100)



付図3 第83・84次調査区遺構実測図(1:200)

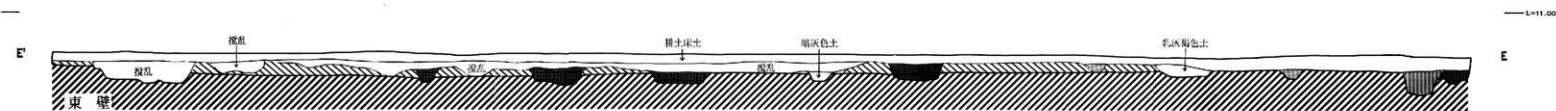
84-2次



83次・84-1次



83次・84-1次



付图4 第83・84次調査区土層断面図(1:100)

國史跡 齋宮跡
発掘調査概報

平成2年3月31日

編集発行 齋宮歴史博物館
印刷 光出版印刷株式会社

本書は、齋宮歴史博物館の許可を得て、
齋宮研究会が増刷したものである。

